

Ultraman G —to come again —

マイケル社長

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「地球」を相手に戦ったあのウルトラマンが、再び登場

なぜ、また地球へ戻ってきたのか

なぜ、再び怪獣が現れたのか

滅びへと向かう人類の行く末はー

## 目 次

第1話	三大怪獣出現！東京大乱戦！	I	1
第1話	三大怪獣出現！東京大乱闘！	I I	3
第1話	三大怪獣出現！東京大乱闘！	III	6
第1話	三大怪獣出現！東京大乱闘！	IV	12
第1話	三大怪獣出現！東京大乱闘！	V	17
第1話	三大怪獣出現！東京大乱闘！	VI	26
主要登場人物紹介			33
第2話	漂流   Exile		37
第2話	漂流   Exile	I I	40
第2話	漂流   Exile	III	44
第2話	漂流   Exile	IV	50
第2話	漂流   Exile	V	56
第2話	漂流   Exile	VI	60
第2話	漂流   Exile	VII	64
第3話	目を覚ませ、男なら！		72
第3話	目を覚ませ、男なら！	II	74
第3話	目を覚ませ、男なら！	III	78
第3話	目を覚ませ、男なら！	IV	84

## 第1話

### 三大怪獣出現！東京大乱戦！

I

凶暴怪獣アーストロン

オイル怪獣タツコング

ヘドロ怪獣ザザーン

登場

くオーストラリア・シドニー      キングスフォードスミス国際空港  
く

夜だというのに、空港のプライオリティラウンジは大混雑だった。激務続きの出張であったため、せめてこの時間くらい優雅に過ごしたいと考えていた藤倉の見通しは無残にも潰えた。

座席はほぼ満席で、ドリンク、フードカウンターにも人の列が続いてしまっている。

これでは、航空会社の高級クレジットカード付帯サービスの恩恵になど預かれるはずもない。

舌打ちをし、とにかく一杯ひっかけるべくドリンクカウンターへと並ぶ。

オーストラリア人の若者たちが大声で笑いながら、カウンターから受け取ったビールを煽っている。

（質が落ちたものだ）

なぜ、こんな年端もいかない連中がラウンジなど利用できるのか。隣のフードカウンターでは、中国人旅行者が現地の言葉で談笑し、浅ましくも皿一杯に料理を汚く盛り上げている。

楽しそうな笑い声を聴くとイライラするのだ。こっちは仕事で来ているというのに。

ようやくビールジョッキを受け取り、空いている席を探すと、ちょうど年配の夫婦が立ち上がって、ラウンジを出たところだった。

藤倉はすかさず空いたテーブルへ座り、隣の椅子に誰も座らせぬよう、バッグを置いた。せめて、誰にも邪魔されずにこのビールを味わいたかった。

よく冷えた一口が喉を勢いよく流れ落ち、大きく一息ついたときだった。

「すみません」

背後から声がした。振り返ると、細身の若い男が立っていた。

「日本語に反応するってことは日本人だね？隣、座らせてもらえねーかな？」

久しぶりの日本語に反応してしまった。男はトレイにステーキやフレンチフライを山盛りになっている。

よほどイヤだと言いたかったが、藤倉は渋々、バッグを椅子から降ろした。

「悪いっスねー」

男は腰を下ろすと、すかさずステーキを刻み、塩とスパイスをかけて食べ始めた。

「うまあーあーしばらくオージービーフも食えなくなるんだよなあ」

口いっぱい肉を頬張り、独り言をぼやく男。藤倉はしかめっ面をして、顔を背けた。

「おじさんも食べる？けっこーイケるよ？」

空気を読まず、男は声をかけてきた。

「いらない」

素っ気なく答え、藤倉はビールをあおった。静かに飲ませて欲しかった。

「おじさん仕事？日本帰るんでしょ？」

藤倉は答えず、咳払いをして男に強い視線を向けた。

「オレさ、日本久しぶりなんだよ。日本人と会うのも何ヶ月ぶりかな。あ、オレね、三堂っていうの。三堂剣太郎。よろしくな！」

何がよろしくな、だ。いい加減ウンザリし、藤倉は席を立った。

こんなことなら、搭乗口の殺風景な待合室の方がよっぽどマシだ。

# 第1話

## 三大怪獣出現！東京大乱闘！

I

I

く日本

石川県珠洲市祿剛崎

UMA日本支部く

夜8時。送迎のアルファロメオから降りたUMA日本支部隊長

冴島 基美長（サエジマ キミナガ）は、上品に仕立てられたタキシード姿のまま断崖にポツカリ穴を開けた洞窟へと入っていった。

一見自然に作られたと思われるその洞窟はしかし、足場は綺麗に舗装され、コウモリや蛇など野生動物が棲みつかないよう、人間には察知できない音波が常に放たれている。

洞窟の最奥地はさほどではなく、180センチある冴島の背丈ほどはある、地元の海神を祀った社がそびえている。仮に誰かが洞窟へ入ったとしても、この社を見れば心理的にそれ以上の侵入を避けようとするはずだ。よしんば社の先へ行こうにも、洞窟の奥行きとなつておりただ岩肌があるばかりだ。

冴島は社の裏手にある、不自然にも岩肌を向いている1匹の狛犬像の口に手を入れた。

すると岩肌の麓が左右に開き、地下へと続く階段が現れた。

階段を降りると、淡いブルーの間接照明に照らされた空間に続く。しばらく通路を進むと、さらに地下の巨大な空間に並ぶUMA戦闘機、通称ハマーが硬化ガラス越しにうかがえる。

通路の終点である、鋼ステンレス製の自動扉が開くと、隊員個人用モニターが仕付けられた円状の大きなデスクがあり、それぞれがモニター、各々と向かってやり取りしている。

冴島が入室すると、中の4人が一斉に立ち上がった。

「二「おかえりなさいませ」二」

「うむ」とだけ返事をする、冴島は円卓から離れた隊長専用のデスクに向かい、ネクタイを外した。

「お呼出でして、もうしわけありません」

席に着くなり、二階 榛香（ニシナ ハルカ）が寄ってきた。

「むしろありがとう。その後の経過は？」

冴島は榛香と、その他の隊員へ目を配らせながら訊いた。

「（こちらを）ご覧ください」

モニターとにらめっこしたまま、守山 護（モリヤマ マモル）

が応えた。

「最初に報告したときより、地温が7度。地表温度は、高いところで5度上昇が見られます。この地域の平均温度と比較すると、いずれも10〜15℃も高いです」

「スキョン。君の見立てはどうか？」

キーボードを叩くのを止め、李 淑敬（イ スキョン）が顔を上げた。

「この程度の火山ガスと地下のマグマでは、噴火の前兆とは考えられません。少なくとも地質学的には問題がないことから、別な要因である可能性が高いです」

スキョンはモニターに地図を展開させた。異常な地温上昇が見られた当該区域である、神奈川県箱根仙石原付近のサーモマップが表示された。

今日午後3時過ぎ、箱根二子山で熱水の噴出が確認され、続けて周囲5キロに渡って地温上昇が見られた。

元から火山帯である箱根の噴火が懸念されたが、地質学の博士号を持つスキョンの出した結論は火山噴火とは程遠いというものであった。

また地温上昇は一時的なものではなく、以降も上がっていく可能性が高まり、定例のパーティに出席している冴島を呼び出すこととなった次第である。

「しかし隊長、この程度の気温上昇はこれまでも観測されたことです。今日は日中暑かったですし、直射日光による地表温度上昇に過ぎないと考えたので、私はわざわざお呼出ですることはないと申し上げました」

苛立ち気味に、日本支部副隊長である陽次朗　　ラインハートが言った。

「違いますよお。地表のみならずともかく、地下15メートルでも同様の温度上昇が見られるから異常事態なんです。もうちよつとこつちの話を聴いてくださいよお」

スキョンが口を尖らせると、「だから、もう少し様子を見てから判断しても良いだろうと言っただろうが」と陽次朗が喰いかかった。

「わかった。陽次朗、榛香。ハマーで現地に飛んでくれ」

「隊長！」

不満気に詰め寄る陽次朗の後ろで、スキョンは我が意を得たりとばかりにドヤ顔を作った。

「考えすぎかもしれないが、箱根という土地でこの観測結果は気にかかると。何かあった場合、東京始め首都圏への影響は必至だ。もしやとは思うが、いよいよここ日本でも動き出したことを想定しよう。2人とも、5分で支度をするように」

唇を真一文字に結んだ陽次朗に、榛香は肩を叩いて出勤を促した。



# 第1話 三大怪獣出現！東京大乱闘！

## III

くオーストラリア シドニー キングスフォードスミス国際  
空港

日本トランスワールド航空 東京羽田空港行き327便 ビ  
ジネスクラスく

「シャルドネ」

ドリンクを勧めてきたキャビンアテンダントに、藤倉はぶつきらば  
うに答えた。

「??失礼しました、もう一度ご注文を」

くぐもるような口調だったので、キャビンアテンダントが聞き取れ  
ず訊いてきた。

「シャルドネだ、一度で聞き取りなさい！」

苛立つ心を、藤倉は隠さなかった。

「大変失礼いたしました、申し訳ございません」

心底申し訳なさそうな表情で、キャビンアテンダントは引き下がっ  
た。

ふて腐れた顔で、藤倉は革製の背もたれに踏ん反り返った。

そもそも、ありとあらゆる因子が藤倉をご機嫌斜めに導いていた。

あれやこれやウザイラウンジを出て、搭乗待合エリアで飲み直そう  
としたところ、日本のオフィスから電話がかかってきた。

出張先への電話は大抵ロクなものではない。案の定、『東京湾底の  
石油パイプラインに送油事故発生』を報せるものだった。

それからは気を取り直しての一杯どころではなくなった。

藤倉が決して部下に任せなかつた顧客・取引先への説明、謝罪に追  
われ、気がついたら搭乗予定時刻寸前を迎えていた。

さすがに機内からの電話は控えるが、日本までの約半日、メールや  
LINEでの対応が山積するだろうことは容易に想像できた。こん

なことなら、抱えているいくつかの取引先を何軒かでも部下に押し付けておけば良かったのだ。

状況と後悔への苛立ちとは、絶対に歯向かってこないキャビンアテンダントにぶつけてやろう。こちらは客である。いつも部下にしているように、怒鳴り散らしてやろうー。

その第一陣が実り、藤倉はわずかながら溜飲を下げた。強張った表情でシャルドネをサーブするキャビンアテンダントからグラスを奪い取り、3分の1ほど飲み干した。

アルコールの作用で胃が熱くなると、また怒りがこみ上げてきた。また、何か言いがかりをつけていびつてやろうとしたとき、背後から聞き覚えのある声がした。

「いやあ、何か悪いなー」

藤倉は目を丸くした。さつきラウンジで図々しく絡んできた、日本人の若造ではないか。たしか、三堂とかいったはずだ。

「三堂様、とんでもありません。せめてものお気持ちですと、当機の機長が申しております。後程、チーフパーサーと共にご挨拶をさせていただきますいとも、仰せつかっております」

「ちよいちよーい、気を使わなくていいよ。てゆうか、マジ嬉しいな、ビジネスクラス」

先ほど藤倉がいびつたキャビンアテンダントが、満面の笑みで若造に接している。クソ、若造の分際でビジネスクラスとは生意気な。

何か文句の1つでも言つてやりたかったが、この若造に見つかつて飛行中絡まれたりするの癪だ。藤倉はアイマスクをつけた。

どいつもこいつも、人の神経を逆撫でさせやがって……。

く日本 神奈川県箱根町・仙石原上空く

点在する温泉旅館やペンションの灯り以外は、箱根仙石原は漆黒の闇に包まれていた。ハマーの高度計がなければ、虚空と大地の区別がつかず、自分の居場所がわからず混乱しかねないほどの闇夜だった。

「スキョン、現在の地温だよ。確かめて」

榛香はインカム越しに、基地のスキョンに呼びかけた。ハンマー底面から棒状の測定器が顔を出し、地表へ向けて音波を発する。

『うわ・・・通常の4倍近いです。気をつけてください、噴火はしなくても、局所で高温のガスや熱水噴出が考えられます』

「わかった、上空から調査続けるね」

インカムを切ると、隣席の陽次朗がため息をついた。

「こんなことばかりして、本当に怪獣なのか、て言いたそうだね？」

榛香が訊くと、目を閉じて頷いた。

「オレはこの目で見るまで、怪獣がここに居るなんて信じられないんだよ」

「でも、怪獣は出現前に必ず何かしらの形で予兆を出す。それが何なのか突き止めるのも、大事なことでしょ？」

「ああ」

生返事だった。榛香は呆れつつも、陽次朗は軍育ちで『予測・分析』よりも『戦闘・殲滅』を叩き込まれたのだ。こういう仕事は苦手なものも領けた。

センサーモニターから警告音が流れた。

『陽次朗さん、榛香さん、気をつけて！硫黄濃度が急上昇してます！機を上昇させてください！』

スキョンが叫んだ。陽次朗は操縦桿を自身に傾けた。ハンマーはホバリング状態のまま、高度を一気に稼いだ。

それと同時に、仙石原になびく一面のススキが突然発火した。一気に周囲の森も発火し、闇夜を紅く照らす。

『振動確認、お二人とも注意して、来ます！』

護の声があった刹那、爆発的に地面がめくり上がり、黒い巨体が身を起こしあげた。

黒い闇の中、白と赤の眼が浮かんだ。

「識別、アーストロン！」

モニターを凝視していた榛香は、表示された怪獣の識別標を読み上げた。

凶暴怪獣アーストロン。頭に天を裂かんばかりの巨大な角を湛え、黒い肌からは絶え間なく白煙が昇っている。

「隊長、攻撃しますか？」

陽次朗は操縦桿をひねり回しながら、訊いた。

『攻撃を許可する。良いか、これが日本におけるUMA初の火力攻撃だ。心してかかるように』

「了解！」

ハマーは機体正面をアーストロンに向けた。榛香は自動照準機を操作し、いつでも攻撃できるようにする。

榛香自身、悟られるまいと必死に隠していたが、震える指は否応なしに陽次朗の視線に飛び込んできた。いくらUMA隊員養成機関を首席で卒業したとはいえ、榛香にとつてシミュレーターやVRではない、はじめての本格的な実戦であった。

陽次朗は咳払いをして、操縦桿に取り付けられた引き金を絞った。空気を斬り裂くような音がして、紫色をした2本の光の筋、レーザーパルスがアーストロンに向かっていく。

アーストロンの両肩に閃光が迸り、怒りと驚きの咆哮が上がる。

攻撃後アーストロンと距離を取ったハマーは、モニターで着弾地点をサーモする。

「レーザーパルス命中。対象への損傷・・・認められず」

額に浮かぶ汗も気にせず、榛香はモニターを読み上げた。

「バカを言うな、出力は最大値だぞ！」

操縦桿を操りながら、陽次朗が言った。

「間違いない！傷つけられてない！」

焦りと怒りを滲ませる榛香が答えた。

『お二人とも！旋回して頭部、顔面を狙ってください！過去の戦闘記録によれば、頭部への攻撃は有効でした、頭を狙ってください・・・』  
護の呼び掛けに応えようとしたとき、『待て』と冴島が割り込んだ。

『ランチャーを使用するんだ』

陽次朗と榛香は互いに視線を合わせた。ハマーには基本装備であるレーザーパルス2門の他、爆撃用の各種爆弾、火力集中攻撃用のミ

サイルランチャーをアタッチメント可能兵装として用意されている。だが照準も着弾も正確にコントロールできるレーザーパルスと違い、場合によっては周囲へ二次的被害を及ぼすこともあるランチャーの使用は、指揮官である支部隊長の許可なしには使用出来ない規則になっている。

そして使用許可の権限を持つ支部隊長としても、おいそれと運用することのないよう、厳格な使用基準が設けられていた。

「隊長、よろしいんですか？」

榛香が訊いた。

『幸い周囲は人口密集地ではない。都市への侵攻阻止、怪獣の撃滅を最優先と考える』

それでも戸惑う榛香に、「隊長がおっしゃるんなら」と、陽次郎は用意を促した。

榛香は頷くと、コマンドを入力した。HAMMERの底面が大きく開き、円形の蜂の巣を思わせる全10門の砲が現れた。

陽次郎はアタッチメント用の引き金を絞った。すべての砲門からミサイルが飛んでいき、全弾アーストロンに命中した。

闇夜の仙石原が昼間のように明るくなり、衝撃波が周囲の森をなぎ倒した。VR訓練で見たことがあるとはいえ、あまりの威力に榛香も護もスキョンも、絶句したまま爆炎を凝視した。

煙が晴れ、燻る地面が現れた。アーストロンの姿はなかった。

「……やったの？」

静けさを取り戻した仙石原を見て、榛香がつぶやいた。

「兵器こそ違うが、似たような威力で粉微塵になった怪獣を何匹も見てきた。アイツもそうだったんだろうさ」

陽次郎は視線を前方から逸らすことなく答えた。現在のUMA日本支部でただ1人、怪獣と直接交戦した陽次郎には説得力があった。

「隊長、どうしますか？」

陽次郎が訊くのと、スキョンが深刻な顔をしてデータをさせるのが同時だった。

『帰投だ。2人ともご苦労』

冴島の返事に、榛香は大きく息を吐いた。  
その安堵も束の間だったと、帰投後に思い知らされることとなる  
は、そのときは考えもしなかった。

# 第1話

## 三大怪獣出現！東京大乱闘！

IV

く石川県禄剛崎

UMA日本支部く

「そんなバカな！」

帰投するなりもたらされた報告に、陽次朗はひとときわ大きい声を上げた。榛香は声こそ発しなかったが、抗議するような視線を冴島に向けていた。

「いえ、隊長のおっしゃる通りです。お二人の放ったランチャーはアーストロンに直撃こそしましたが、爆発の中アーストロンは地中へ潜ったものと思われます。そして10分前に小田原で、つい先程は茅ヶ崎で、震源自体が移動していると思われる地震が観測されています。状況的に、アーストロンは健在と考えて間違いないんです」

ラップトップを見せながら早口でまくしたてる護に、陽次朗は鋭い視線を注いだ。

「護、貴様、オレの照準が狂っていたとでも言いたいのか？」

「い、いえ、そうじゃありませんよ」

顔の前で手を大仰に振り、護が答えた。

「単純に、アーストロンにはランチャーすら効果が薄かったと考えられます。そのう、決して陽次朗さんの腕に問題があるとか、そういうことじゃ・・・」

言い淀んだ護は、怯えた表情で陽次朗を見据えた。胸ぐらをつかみ上げたまま、陽次朗は苛立ち気味に言った。

「ランチャーの火力がどれほどか、貴様知ってるよな？アーストロンはそこまで強固な皮膚だったか？各種怪獣の耐久性を弾き出した奴は誰だ？貴様だよな、護。貴様、自分の計算が間違っていたとでも言うのか？おい」

泣きそうな顔で首を横に振る護。

「やめな、陽次朗」

胸ぐらを掴む腕に、榛香は手をかけた。

「あたしも見たよ。あんたの照準は正確だった。にもかかわらずア―

ストロンは健在。要するにランチャーそのものが通用しなかったんだよ。護のせいじゃないし、護も泣くのやめな」

いつのまにか、護の両目から涙が流れていた。陽次郎から解き放たれると、護は腕で涙を拭った。

「クソ、男のクセに情けない」

捨て台詞のように語調を荒げる陽次郎に、「まあ、落ち着くんだ」と冴島が宥めた。

「スキョン、他にも異常現象があるな、皆に説明してほしい」

冴島に促されたスキョンは、まつ毛カラーを置き、デスクに向き直った。

「こんなときまで、メイクもいい加減にしろ」と食って掛かる陽次郎に、冴島は向き直った。刺すような目を向けられ、陽次郎は首をうなだれた。

「はい。えっとお、陽次郎さんと榛香さんがアーストロンと交戦中ですね、東京湾底を走る送油パイプラインが破断する事故が発生しました。それとですね、時を同じくして、東京湾底で原因不明のメタンガス放出が確認されています」

「それがどうした？単なるパイプラインの劣化だろ」

「陽次郎さん決めつけないでくださいよお。いいですか、送油ラインが破損したっていうなら、フツー湾内に原油が流出して大規模な汚染が発生します。今回は破損こそ確認されましたけど、海洋汚染が確認されないんです。逆に、メタンガスによる海上汚染が深刻です。このままだと、陽が昇れば東京の交通網は大混乱ですよお。羽田の離発着制限されますモン」

「スキョン、貴女の見立てはどう？」

膨れ顔の陽次郎を無視し、榛香が訊いた。

「海洋汚染が生じてないってつまり、上手い具合に溢れた原油が処理されてるんですよ。で、マモーと追及した結果、原油を呑む怪獣が現れたって仮説に行き着いたんです」

「そのマモーって呼び方やめてくれよ」

呼ばれた護が、弱々しくつぶやいた。



「おいちよつと待てよ、それってまさか・・・」

言い淀んだ陽次朗を、スキョンが制した。

「そうです。オイル怪獣タツコング」

その名前を聴いた陽次朗は歯噛みした。

「ヤツか。ヤツが、この日本に・・・」

「まだ仮説ですよ？ですが、それ以外の可能性がどうも考えられなくて・・・」

護はそれ以上言葉を発しなかった。羅刹のような険しい顔をした陽次朗に慄いたからだだった。

「ヤツのせいで、オマーンとバーレーンが無政府状態になった。アイツ一匹で、世界にどれほどの損失をもたらしたか・・・」

血が滲むほど拳を握る陽次朗に、護は固唾を呑んだ。

「しかもスキョン、あんたメタンガスって言ったね？原因はやっぱり・・・」

空気を変えるように訊く榛香に、スキョンはマスカラを置いた。

「はい。ザザーンだと思います。タツコングが現れる箇所に、ザザーンは必ず出現しています。ずっと、縄張り争いしてるんでしょーねえ」

スキョンが出した映像には、東京湾が激しく泡立つ様子が映し出されていた。

「現在東京湾は、全域に航路・空路への航行規制が行われています。これほどの泡立ちだと船舶といえど浮力が奪われて沈没しますし、航空機もメタンガスを吸ってエンジンから出火しかねませんからね。アーストロンも問題ですけど、こつちも同じくらい問題です」

帰投命令が出された理由がはつきりし、榛香と陽次朗はため息をつくと同時に、慄然とした。

「みんな聴いてくれ」

奥のデスクから冴島が声を発した。全員が視線を向けた。

「東京に三体の怪獣が出現しようとしている。おそらく東京湾底では、タツコングとザザーンが争いながら第一号埋立地へと向かっている上、アーストロンの予想進路も東京臨海部を指している。日本では

かつてない、一度に三体を相手にした戦闘を敢行する。みんな、やれるな？」

「はい！」

4人の返事に頷くと、冴島はより一層声を張り上げた。

「ハマー全機出動！」

↳東京都大田区・東京羽田空港↳

すっかり寝不足で極度に機嫌を損ねた藤倉は、入国審査・税関検査を抜けてあくびを噛み殺しながらスーツケースを引きずり、吉野家へと入った。

せっかくのビジネスクラスでのくつろぎも、後部座席で賑やかにしゃべるあの若造とキャビンアテンダントたちのせいで台無しになった。

よくはわからないが、聞こえてきた内容ではあの三堂とかいう若造は、シドニーの空港で体調を崩した老人を救い、その礼に報いるためビジネスクラスへと招待されたらしかった。

褒められるべきではあるが、あんな貧乏臭いナリしてビジネスクラスに座るなど言語道断。かといって見つかつては機内で絡まれること間違いないため、不満を募らせまくるビジネスクラスのフライトと なってしまったのだ。

周囲の客もやかましい！と注意すれば良いものを、皆で若造を囲み酒盛りし始めたことも気に喰わなかった。どいつもこいつも、ビジネスクラスに搭乗する品格の無い連中ばかりだ。

「並」

ボソツとぶつきらぼうに注文したが、そんな客には慣れているのか、店員は黙ってオーダーを厨房に通した。それが腹に据えた。返事くらいすればどうだ。いったい、誰のおかげでここで働いていると思うのだ？

「うまー・うまー！」

隣で声がした。この底抜けに馬鹿そうな明るい声は……。

「牛丼、うめー！」

あの三堂とかいう若造が近くに座っていた。

「あれ、おじさん？おじさんも牛丼食べに来たの？」

マズイことに気づかれてしまった。忌々しげにため息をついたが、彼には伝わらなかった。

「これもオージービーフなんだろうけど、やっぱりこのタレと米が最高だよなあ」

当たり前前だ、私が仕入れている牛肉だ。そう答えたかったが、こんな男とは口もききたくない。運ばれてきた牛丼をかき込んでさっさと会社へ行こう。

そう思った時、にわかになら騒がしくなった。救急車かパトカーのサイレンが遠巻きに聞こえ、もつと先からは地響きのような音がする。

『羽田空港よりすべてのお客様へご案内申し上げます。ただいますべての出発便・到着便、並びにエアポートシャトルの運行を停止しております。お客様にはご不便をおかけしますが、次のご案内までお待ちください』

やれやれ……。食欲まで失せた。シャトルが動かないのでは、会社へも行きようがない。

井を置き、スマホを取り出した瞬間、遠くから爆発音がした。

第1号埋立地の方角に、大きな火柱が上がった。

店内が騒然とする中、あの三堂とかいう若造は急に顔色を変え、席を立った。

「店員さん、お勘定。上手かったよ、とつても」

店員にこそ笑顔を見せたが、支払いを終えると、ヘラヘラした顔色を完全に失った、シリアスな表情を見せた。

# 第1話 三大怪獣出現！東京大乱闘！

V

東京都江東区 第一号埋立地

炎上する倉庫街を、港湾作業員たちが逃げまどっていた。海上から炎が吹き上がり、さらに延焼範囲を拡げていく。

倉庫群から停泊中のタンカーに引火し、大爆発が起こった。

炎と黒煙の中、巨大な鞠玉のような怪獣が瓦礫を蹴散らしながら上陸した。

オイル怪獣タツコング。

そのユーモラスな姿に似合わず、無尽蔵ともいえるバイタルと、体内に蓄えられたオイルを高熱火焰に換えて噴き出す、脅威の怪獣だ。

対岸には、緑色に染められた海から緑色の巨体が身体中から体液を滴らせつつ上陸した。

ヘドロ怪獣ザザーン。

不気味な体色とたらこのような唇から猛毒のガスを吐き出す、厄介な怪獣。

そして二匹は天敵、犬猿の仲であった。

タツコングが威嚇するように吼え、丸い身体を突進させていく。ザザーンは怯みつつも、タツコングの顔面にガスを見舞った。

慌てて後ずさり、お返しとばかりに火焰を噴き出す。逃げ回るザザーンの背後が火の海になり、火災は倉庫の隣に構築された化学コンビナートに引火した。

精製施設、ガスタンクが吹き飛び、猛烈な炎が竜巻上に天を焦がす。能登半島から数分で、ハマー4機が到着した。

わずか数分で変わり果てた東京の景色に、榛香は思わず唾を飲んだ。

『全員聞いてくれ。軍は市街地ということもあり、投入戦力が限られる。厚木からアタッカーオスプレイが飛び立ったが、まともに対抗できないものと考えられる。正確に確実に、レーザーパルスを当ててくれ』

インカムから冴島の指示が飛び、「了解！了解！」と返事をする。

「よし、榛香、お前はザザーンを頼む。スキョンは空域を転回しながら陽動、要撃。オレはタツコングをやる。護、観測をやれ」

操縦桿を握ったまま、陽次朗は全員に指示する。

「陽次朗さん、僕もやれます！」

「ダメだ。お前のシミュレーターでのスコアでは、まだHAMMERの実戦は早い。攻撃の効果を見極めるのも大事な仕事だ。わかったな？」

顔こそ見えないが、護の必死さと焦りが伝わってきた。

「照準、よし。発射！」

榛香が先陣を切り、レーザーパルス二門を放った。ザザーンの腹部に吸い込まれ、白煙が上がった。

陽次朗も続き、タツコングの顔付近にレーザーパルスを当てる。攻撃に反応し、タツコングが火焰を向けてきた。操縦桿を絞り上げ、陽次朗は上空に逃れた。

注意を削がれたタツコングに、スキョンは背後からレーザーパルスを当てる。向き直るタツコングを旋回し、そのままザザーンの後頭部に命中させた。

「護、効果は？」

陽次朗が訊いた。

「目視による損傷、なし。効果が認められません」

榛香は舌打ちし、HAMMERを前進させた。立ち上る黒煙を避け、ザザーンに続けざまにレーザーパルスを撃ち込んでいく。

放たれたガスを回避し、上空からさらに二発、攻撃を当てる。

「おかしい、これだけ当ててるのに……！」

歯噛みする榛香に、ザザーンはガスを放って応戦する。機体にこそダメージはないが、機内にガスが侵食すると危険だ。榛香は操縦桿を横倒しにし、その態勢のまま引き金を絞った。

「ダメだあ……」

「くそ、こっちもダメだ！」

陽次朗が叫んだ。

「ランチャーを使えば……！」

スキョンが苦しげに言った。

「いけない。箱根と違つてここは東京だぞ。アレは使えない」

スキョンは悔しそうに唇を結んだ。

『護、攻撃を許可する。低速でいいから、必ず当てるんだ』

冴島の指示に、陽次朗が噛みついた。

「しかし隊長、護のスコアは基準に達していません！」

「そんなこと言つてる場合じゃないでしょ！護、あたしたちがフオローするから、照準調整して。大丈夫だから」

言いながら、榛香はタツコングとザザーンの間をすり抜けた。榛香を追うザザーンの後頭部に、護は照準を合わせる。

ハマーをホバーモードにし、機体を安定させる。だがあちこちで巻き起こる火災のせいも、気流が悪く機体がいまいち安定しない。照準がブレ、なかなか引き金を絞れない。

「何をモタついてるんだー！」

陽次朗の叱責が飛び、護は顔中に汗を浮かべた。やろうとすればするほど気が焦るのだ。

「マモー、がんばー！」

スキョンの励ましも、耳に入つてこない。

榛香のハマーは機首を回し、もう一度ザザーンの正面を向いた。

ちようどガスを吐こうとしたザザーンは動きを止めた。照準が当てはまり、モニターが点滅する。

護は思わず目をつむつて引き金を絞った。見事、ザザーンの後頭部にレーザーパルスが当たり、ザザーンは振り向いた。

焦りが喜びに取つて代わり、護は嘆息をついた。

「護、回避してー！」

榛香の声で我に返り、護は機体を傾けた。危うくザザーンのがスが直撃するところだった。

第一号埋立地にかかる橋は、避難する人々でごった返していた。

避難者たちの波をかき分けるように、剣太郎は第一号埋立地へ足を

走らせた。

橋のたもとで足を止め、爆発音と炸裂音が断続的にこだまする倉庫群の先に目を馳せた。

足元が揺れ出した。避難する人たちも足を止め、よろめいて街路樹や建物に身を委ねた。

剣太郎の数十メートル先でマンホールが吹き飛び、海から湯気が昇り始めた。

剣太郎は険しい目つきのまま、先へ向けて走り出した。

ハマーの攻撃を受けつつも、タツコングはザザーンに噛みついた。ザザーンはつんぎくような悲鳴を上げ、タツコングを殴りつける。もみ合ったまま、二匹は倉庫街に雪崩れ込んだ。瓦礫を振り払い、タツコングは火焰を噴いた。

ザザーンの下半身から煙が上がり、ザザーンは港湾クレーン群に仰向けに倒れた。

そのとき、ザザーンの倒れた付近から土煙が噴き上げた。地面が激しく揺れ、地下から大きな角を誇る怪獣が姿を現した。

「アーストロン・・・！」

榛香は語気を強めた。

「くそ、やっぱりコイツ死んでなかったのか！」

機体を整え、陽次朗は忌々しそうに怒鳴った。

天に向けて吼えたアーストロンは、天敵のそばに現れた怪獣に驚いているタツコングに突進していった。

タツコングの巨体はアーストロンの突進を阻んだ。一度は倒れるも、アーストロンは口から熱線を吐いた。

タツコングの周囲が爆破され、炎に包まれる。態勢を整えたアーストロンに、背後から緑色のガスが浴びせられた。ザザーンが復活したのだ。

アーストロンは苦しそうに転げ回った。コンビナート群が倒壊し、

噴出したガスに引火し大爆発が起こる。

炎の中立ち上がり、アーストロンはザザーンとがっぷり組み合った。そこにタツコングが近寄り、火焰を浴びせる。

「厄介なことになった、くそー！」

悪態をつきつつ、陽次朗は機体を操りアーストロン、タツコングにレーザーパルスを当てていく。ホバー状態を保持し、護は引き金を絞ったが、激しく動く三匹にうまく当てることができず、ザザーンの足元が吹き飛んだ。

「マモー、どんまい！」

護の上空を、スキヨンは飛行する。狙いをつけ、アーストロンの頭部に命中させる。

うるさそうに首を振り、アーストロンは熱線を吐いた。スキヨンの機体後部をかすり、HAMMERの塗装が焦げ付いた。

「スキヨン、気をつけてー！」

対角線上から榛香は機体を飛び込ませ、絶妙な機体操作で連続して三匹の胴体にレーザーパルスを当てていった。機体を翻し、今度は斜め上からアーストロンとタツコングに攻撃を浴びせていく。

実戦経験こそなかったが、HAMMERの操縦及び攻撃に関しては榛香がもつとも高スコアであった。その成績を遺憾なく発揮し、向かってくるザザーンの脚部に攻撃を命中させた。

「よし、榛香！正面は任せた！」

言うのと、陽次朗は機体を垂直に上昇させ、急降下しながらレーザーパルスを撃ちまくった。上空から雨のように飛び交う攻撃に混乱する三匹に、榛香は正攻法ともいえる水平攻撃を仕掛けていく。

吼えるザザーンが、勢いよくガスを吐く。榛香は操縦桿を傾け、回避させた。だがそこに、タツコングの火焰が直撃した。

「うああ!!」

左ローター付近から出火し、榛香の機体はバランスを崩した。

『榛香、離脱しろ』

冴島の指示を待つこともなく、榛香は歯を食いしばり、機体を横に滑らせるように不時着の態勢を取った。だが今度は、怒りのあまり跳



ね上げられたアーストロンの尻尾が機体底に衝突した。

「榛香！」「榛香さん！」

天と地がひっくり返ったように榛香のハンマーは回転しながら、湾外側の空き地に突っ込んだ。爆炎が上がり、榛香以外の三人のインカムに砂嵐のような音が飛び込んできた。

『榛香を救出しろ！』

冴島は珍しく、強い口調で指示を出す。焦り、陽次朗と護は空き地にハンマーを着陸させるべくホバーモードにする。

「スキョン、引き続き陽動しろ！」

半ば呆けていたスキョンは、陽次朗の声で正気を取り戻した。

「くっ、よくも榛香さんを！」

こちらへ向かってきたアーストロンの、怒りのレーザーパルスを放つ。

く大田区・東京羽田空港く

エアポートシャトルが停止し、陸の孤島となった羽田空港では、大勢の利用客が直に第一号埋立地、あるいはテレビで様子をうかがっていた。

「どうとう日本にも怪獣が現れたか」

「ヤバいんじゃない？一度に三匹なんて」

あちこちが騒然とする中、藤倉は「うるさい！こっちは電話してるんだぞ！」と声を荒げた。

周囲の鋭い視線にもかまわず、藤倉は電話口で怒鳴る顧客に向き直る。

「誠にもうしわけありません。この騒ぎが落ち着きましたら、すぐにお詫びと説明にうかがいます。ハイ、恐れ入ります」

電話を切り、怒り任せに近くの空ペットボトルを蹴飛ばした。

「ちきしょう、何がシャトルが動かないなら歩いて来い、だ！」

悪態をつき、階下のタクシー乗り場を仰ぎ見た。空港内まで、長蛇の行列だった。配車アプリを利用しようにも、出払い中、または災害等の事由でご利用になれません、などとメッセージが表示されるばかりだ。

このままでは、あの若造に倣い、歩いて空港から出なくてはなるまいか……。

大きく息を吐き、藤倉は空港の外に出た。

額がヒヤリとし、榛香は覚束ない視線を泳がせた。ポーっとする頭が次第にはつきりしてくると、激痛が脳天を突いた。

「気がついたか？」

正面を向くと、1人の男性が自分の手当てをしていた。見ると左上腕に添え木の上から包帯が巻かれ、額にはガーゼのようなものを当てられている。

「あ、あなたは……っぐッ！」

一気に血が喉に上がってきたかと思うと、口から流れ出した。

「おう、あんまりしゃべらない方が良いぞ。少なくとも破裂はしてないはずだが、内臓に損傷があるかもしれない」

激しく痛む胸を押さえながら、榛香は焦げ付くようなにおいの先を向いた。

搭乗していたハマーは全損こそ避けられたが、激しく黒煙を上げている。それにしてもどうやって、この男性は自分のことを助け出したのだろうか。

「ちよ、どうやってあたしをコクピットから？」

多少血を交えながら、訊いた。

「んん。オレ、オーストラリアから来たんだけど、そこで学んだんだ」「それって、あなたもしかしてUMAオーストラリアの……？」

激しく咳きこみ、胸に激痛が走る。痛みは胸を覆うように、首筋まで連なった。

「こりや肋骨も折れたか？いまから触診って行って、胸を触るからな。どうか許してくれ。ひっぱたくなよ？」

男は慣れた手つきで、榛香の胸に掌を当て、やや強めに押し込んだ。鈍い呻き声を上げ、榛香は身をすくめた。

「ごめん。悪かった。肋骨もヒビ入ってるな」

男はジャケットを脱ぎ、枕にして榛香の頭に当てた。

「おーい！」

少し先に着陸したハンマーから、陽次朗と護が駆けてきた。

「榛香、大丈夫か!？」

「榛香さん!？」

慌てて駆け寄る二人を、男は制した。

「左上腕部の骨折、右足首強打による内出血、内臓・肋骨に損傷あり。安静を維持だ」

冷静に告げる男に、陽次朗と護は怪訝な目を向けた。

「あんた、医者か?」

詰め寄る陽次朗に、男はポケットから身分証明書のようなカードを出して見せた。

「三堂剣太郎。オーストラリアで医師のライセンスを取得してる」

得心がいったように頷くと、陽次朗は即席の担架を拡げ、護と二人で榛香を担ぎ上げた。

「つつっ・・・!」

低く唸り声を上げる榛香に、思わず手を止めた。

「姿勢を極力変えず、ゆっくり降ろすんだ。拘束用テープは?」

剣太郎に訊かれ、「担架わきに付いてます」と護は答えた。

剣太郎はテキパキと拘束テープで榛香の身体を固定させる。UM A隊員は最低限度の医療行為も訓練するが、本職にはやはり及ばなかった。

「これでよし。できることは施したが、あくまで応急処置だ。すぐ病院へ」

「おお、すまん。あんたも早く避難しろ」

陽次朗は護と担架を持ち、護のハンマーに向かった。

二人が見えなくなったところで、剣太郎は周囲を見回す。自分以外、誰もいない。

少し先では、相変わらず三匹の怪獣が争い続けている。

剣太郎は胸元から三角形のペンダント、デルタプラズマを取り出し、軽く握った。

紫色に光を発すると、剣太郎は目を閉じた。すうつ、つと意識が光の中へ吸い込まれ、光が弾き出されるように発せられた。

三匹の怪獣の前に、すつと立ち上がった。

担架の上の榛香も、担架を持つ陽次郎と護も、そしてハマーで陽動を続けるスキョンも、そして埋立地から逃れる人々、テレビで様子を見守る人々も、目にした全員が息を呑んだ。

「ウルトラマン・・・！」

護が驚愕と歓喜の表情を浮かべた。

「なんで、今頃・・・！」

コクピットのスキョンは、悔しげに言い放つ。

モニター越しに見ていた冴島は、表情を変えることなく、30年ぶりに姿を現した銀色の巨人を凝視していた。

# 第1話 三大怪獣出現！東京大乱闘！

## VI

「デューアー！」

ウルトラマングレートは掛け声を上げると、突然の闖入者に向かってきたアーストロンをチョップで薙ぎ倒し、ザザーンと取っ組み合いになった。

ヘドロの藻で覆われた巨体に、グレートは立て続けにチョップとパンチを繰り出す。

ザザーンの腕がグレートの頭を包み、強烈な腐臭で窒息させようとしてきた。

右手を突き出し、正拳突きをザザーンの胸に叩き込んだ。巨体が吹き飛ばされ、炎上するコンビナートに倒れるザザーン。

背後から角を振り下ろしてきたアーストロンに足払いをかけ、尻尾を持ち上げて振り回した。埋立地を外れ、東京湾に落ちるアーストロン。

突進してきたタツコングを両手で押さえ、勢いを削ぐ。

だがタツコングの重量を含めた突進には馬力があり、グレートでも押されてしまう。踏ん張る足が引き摺られ、防波堤に食い込んだ。

止む無く、密着状態で両手にエネルギーを送り込む。青白く光がほとぼしり、タツコングは大きく仰け反った。両拳から放たれるエネルギー光線・ナックルシューターのゼロ距離射撃であった。

反撃に転じたタツコングの火炎を避け、グレートは側面から蹴り上げた。体型的に有効打とはなり得ず、再度タツコングの突進攻撃を喰らってしまった。

態勢を整う違もなく、グレートの背中にアーストロンが自慢の角を突き立ててきた。

前のめりに足をもつれさせ、グレートは振り返った。

アーストロンは口から熱線を吐き出し、グレートの腹部を狙いすました。

すかさず三角形のバリア、トライアングルシールドを展開させ、熱線を分散させて防いだ。

自慢の攻撃が防がれたことに憤慨したのか、アーストロンは吼えながら向かってきた。突き立てた角を持ち、勢いを削ぐ。グレートは両手に力を込め、角を折らんとした。頭頂部に異変を感じたアーストロンがもがき、倉庫街の瓦礫を踏み崩していく。

そのとき、グレートは背後に仰け反った。タツコングがグレートの左足に噛み付いたのだ。

タツコングの歯は鋼鉄製の石油パイプラインを噛み砕くほど強く、そして鋭い。硬質なグレートの皮膚にも難なく食い込んだ。

形勢を見極めたアーストロンのパンチがグレートの左頬に炸裂した。苦しむグレートに、続けて角を振り下げる。

火花が散り、グレートは勢い良く倉庫街に雪崩れた。

『スキョン、ウルトラマンを援護するんだ』

しばし静観していた冴島たちだったが、インカム越しに冴島が指示してきた。

「えっ?でも・・・」

当惑するスキョンに『少なくともウルトラマンは怪獣たちに立ち向かっている。我々の敵ではないはずだ』と語りかけた。

「くっ・・・」

スキョンは唇を噛んだが、隊長である冴島の指示であれば仕方がない。ハンマーを旋回させ、倒れたグレートを踏みつけるアーストロンにレーザーパルスで攻撃を仕掛けた。

「怪獣がいなけりゃ、あんたなんか・・・!」

瓦礫の中で起き上がろうとするグレートに敵意を剥き出しにしつつ、スキョンはタツコングへ攻撃照準を切り替えた。

フラつきながらも立ち上がったグレートに、濃緑のガスが降りかかった。ザザーンの毒霧攻撃だった。

「グヘアッ!」

苦しげに右手を突き出し、左手で首を覆う。ザザーンは毒霧を吐き続け、後ずさるグレートを追う。グレートの胸にあるカラータイマーが点滅を始めた。

大気汚染の激しい地球では、ウルトラマングレートはその巨体を3分間しか保つことができない。

苦しむグレートに、タツコングとアーストロンはそれぞれ火炎、熱線を浴びせた。たまらず、東京湾に転がり落ちるグレート。

海面をうかがうアーストロンとタツコングに、ザザーンの狙いを外した毒霧が降りかかる。怒った2匹が向き直り、ザザーンに襲いかかる。スキョンは3匹が固まったのを見逃さず、ホバー状態で旋回しながらレーザーパルスを放っていく。

1号埋立地の対岸、新木場に上がり込んだグレートは、大きく呼吸をしてダメージを軽減させた。

3匹が三つ巴の争いを始め、完全に注意が削がれたのが確認できた。

「アアアッ！」

勢いをつけてジャンプし、両膝を折る。膝を立て、その勢いのまま3匹に飛び込んだ。

アーストロンとザザーンに飛び膝蹴りが叩き込まれ、跳ね飛ばされるように炎上する倉庫街に突っ込んだ。

いきなり戻ってきたグレートに驚くタツコングの顔面に、強烈な踵落としをお見舞いする。

タツコングの顔が地面に食い込んだ。怒りの咆哮を上げ、タツコングは火炎を放つ。

だがグレートは火炎を両手で受け止め、炎を凝縮し始めた。じわじわと炎の塊が出来上がっていき、弾き返すようにグレートは炎を放った。相手の攻撃を数倍に増幅させて撃ち返す、マグナムシールドだ。危険を察知して転がり避けたタツコングだったが、猛烈な火炎は立ち上がったザザーンに命中した。

一気にザザーンの全身が燃え上がり、やがて炭化しながら崩れ落ちていった。

あまりの出来事に怯え、海へ逃げようとするタツコングに、グレートは両手を向けた。左手をいっぱいには伸ばし、右手を弓を引くように下げる。刹那、突き出した右手から光弾が放たれた。貫通力に優れるアロービームだ。

光の白刃はタツコングの巨体を貫いた。ポツカリ空いた傷口から爆発が広がり、タツコングは粉々に砕け散った。

残ったアーストロンは、逃げることもなく憤然とグレートに向かってきた。角を回避し、振り向きざまにまわし蹴りでアーストロンを蹴り飛ばす。

その隙に、グレートは両手を突き出して握りしめた。両手の拳に放電がつんざき、縦に開く。上下の手から光弾が走り、途中で合流するとアーストロンに命中した。

アーストロンの動きが止まり、全身に電気が走る。

さらにもう一度、グレートは同じ光弾を放った。異なる高出力の電磁波を光弾にし、激しい電離作用でどんな対象も破壊してしまう技、バーニングプラズマだ。

花火のような火の粉を撒き散らしながら、アーストロンは爆発した。破片の一片も残らなかった。

日本に初めて現れた3匹の怪獣を倒したグレートに、ある者は歓声をあげ、またある者は罵声をあげた。

「バカヤロー！なんでもっと早く来てくれなかったんだあ!？」

特に、日本以外で様子を見ていた人間たちは、圧倒的に後者の反応であった。

UMAでは、スキョンがホバー状態を維持しつつ、照準をグレートに合わせた。

無論、グレートには攻撃命令は出されていないが、スキョンはいつでも撃てるよう、憎しみを込めた眼差しでグレートを見やった。

「シュワッ！」

3匹の怪獣を倒したグレートは、暑い灰色の空に向かって飛んで



行った。

↳翌日 東京都港区・山忠商事株式会社本社↳

【今回は本当にごめん】

スマホ画面に表示されたLINEに、美樹は手を止めて返信をす  
る。

【別にいいよ。今回はお手並み拝見が目的だったから。東京襲撃はお  
まけでできちやえばいいや程度だもん。ま、ウルトラマンが現れたの  
はまったくの想定外だったけどね】

すぐさま既読がつき、返信文が表示される。

【でも、3匹も用意したのに、悔しいよ、オレ】

【いいって。焦らざいこうよ。またチャンスはあるし。優希ちゃんが  
次、準備してるようだから、そっちに注目だね】

【ありがと。美樹は優しいね】

【仏の顔は3度まで、あたしの顔は2度までだからね、瑛太?】

驚愕に満ちたスタンプが返ってきて、美樹は微笑んだ。だが冗談で  
はなかった。

「西村くん」

上司である藤倉が、尖った口調で自分を呼んだ。昨日出張から帰っ  
てから、いつにも増して機嫌が悪いのだ。

「仕事中にスマホなんかいじるんじゃない!」

「すみません」

美樹は下げた頭で、聞こえぬように舌打ちした。

↳石川県珠洲市・UMA日本支部↳

「全員に話がある」

冴島の号令で、陽次朗に護、スキヨンの3人は司令室に集められた。陽次朗は面白くなさそうにミルクセーキを飲み、護は昨日現れたウルトラマンのニュース記事に夢中になっている。スキヨンはまつ毛カーラーで、自慢のまつ毛の手入れをしていた。

司令室の扉が開いた。

「榛香」「榛香さん」

電動車椅子に乗った榛香が現れたのだ。

「おい、もう大丈夫なのか？」

「うん。最初の処置が適切だったらしくて、内臓の出血も治った。動かすと痛いけどね」

「そういえば、たまたまお医者さんがいたんですよね？」

スキヨンが訊いた。

「そう。でも、どうやってあたしをハンマーから降ろしたのか、わかんないんだ」

3人とも首を傾げた。ハンマーのハッチを開けられるのは、UMAの訓練を受けた者だけのはずだった。

「あの医者、オーストラリアから来たって話してたんだけど、あんな隊員いたっけ？」

「オレのことか？」

扉が開くと同時に、噂の当人が冴島と共に現れた。

「あー！昨日のー！」

護がメガネを直し、指差した。

「おう姉ちゃん、具合はどうだ？」

姉ちゃん、と呼ばれた榛香は、戸惑いつつも頷いた。

「みんなに紹介しよう。本日、日本支部に着任した、三堂剣太郎だ」

冴島の紹介に、全員が目丸くした。

「三堂剣太郎、よろしくな」

「隊長、それって……」

「聞いてませんよっ！」

陽次朗と榛香が、抗議するように言う。

「本当はもっと早く話すべきだったが、一昨日からの怪獣出現で後手になってしまったな。すまない、すまない」

「それにしたって……」

口を尖らせる榛香に、剣太郎は顔を近づけた。

「どれ、早速今日の診察だ。問診始めるぞ」

「え……えっ？」

戸惑う榛香を無視して、冴島は言った。

「みんな、三堂には隊内の医系主任として働いてもらう。無論、全体の仕事も満遍なくしてもらうがな」

決定事項だ、と言わんばかりに声を張る冴島に、ドヤ顔をする剣太郎に、4人は目を合わせた。

「剣太郎、本当に大丈夫なのか？」

精神の奥底から、グレートが話しかけてきた。

「大丈夫。なるようにするよ」

急に独り言を話す剣太郎に、さらに戸惑いの度合いが増した。

## 主要登場人物紹介

・三堂 剣太郎（ミドウ ケンタロウ）

年齢：28歳

国籍：日本

UMAオーストラリア支部所属（UMA訓練課程修了）↓日本支部（冴島より招集）

日本帰国前、2年間オーストラリアで生活していた以外の経歴は不明。

オーストラリアにて外科医の免許を取得。

・冴島 基美長（サエジマ キミナガ）

年齢：53歳

国籍：日本

UMA日本支部長。財団法人「冴島ファウンデーション」主宰者。冷静で物腰の落ち着いた性格だが、「偏屈者」「怪人」とも囁かれる。

・陽次朗 エリオット（吉島） ラインハート

年齢：32歳

国籍：アメリカ（日系アメリカ人）

UMA日本支部副隊長格。

元アメリカ海兵隊↓欧州統合軍特殊部隊↓欧州統合軍機甲部隊↓UMA日本支部。

厳格で融通が利かず、「データによる怪獣の研究」を疑問視。カフェイン飲料が苦手。

・二階 榛香（ニシナ ハルカ）

年齢：28歳

国籍：日本

城南大学↓UMA隊員養成所↓UMA日本支部。

過去例のない優秀な成績で養成所を卒業。

格闘・操縦・射撃において比類なき成績を誇る（東京での怪獣出現まで実戦経験なし）。

気が強く、負けず嫌い。

UMAが公開した動画の影響か、ファンレターが山ほど届く。

・李 淑敬（イ スキョン）

年齢：22歳

国籍：韓国

西海大学↓UMA日本支部。

気象、地質学の専門家で、17歳から飛び級で大学生になる。

趣味のメイクをYouTubeに公開し、人気YouTuberとしての顔も持つ。

母国語はもちろん日本語、英語、北京語、広東語、ヒンディー語に堪能。

・守山 護（モリヤマ マモル）

年齢：20歳

国籍：日本

城北大学↓UMA日本支部。

動物学、(学問として正式な認定は受けてないが)怪獣学の専門家。怪獣生態の知識を買われ、大学を休学してUMAへ。

気が弱く、泣き虫。戦闘訓練のスコアは下の下。

視力が弱く、眼鏡を欠かさない。

・米山 光吉（ヨネヤマ コウキチ）

年齢：75歳

国籍：日本

警視庁刑事部↓警視庁公安部↓警視庁通信局↓UMA日本支部。

UMA通信指令担当。  
本人いわく「年寄りの暇つぶし」でUMAに入隊。  
陶器収集が趣味。

・藤倉 慎司（フジクラ シンジ）  
年齢：45歳

国籍：日本

山忠商事第一渉外課課長。

極めて自己中心的な人物だが、有能な会社員。  
妻、息子とは別居中。

・藤倉 麻奈美（フジクラ マナミ）  
年齢：40歳

国籍：日本

藤倉 慎司の妻で、新興宗教団体「まことの光」会員。  
夫との仲は険悪で、息子も育児放棄している。

・藤倉 純（フジクラ スミヤ）  
年齢：9歳

国籍：日本

藤倉夫妻の息子。

・鈴村 美樹（スズムラ ミキ）  
年齢：26歳

国籍：日本

山忠商事第一渉外課事務員。藤倉の部下。

・ジャック・シンドー

年齢：56歳

国籍：オーストラリア

UMAオーストラリア支部↓シドニー大学教授。

宇宙科学の専門家。

2017年に起きた「蜂起の日」を境に、妻のジーン・シンドー博士と共に行方不明。

## 第2話

### 漂流

—Exile—

マグマ怪地底獣ギール

登場

↳長野県北部

九郎ヶ岳

西日本電力第四地熱発電所建設地

「監督、ダメだあ！」

ベテランの作業員、橋場がブルドーザーを降りて、現場事務所に駆け込んできた。

「なんだ、また熱水か？」

中華弁当の箸を止め、現場監督の井本は立ち上がった。

「ああ。もう噴水みてーにドババァッ！て出て、もう熱くていらんねえら！」

「よし、ちっと待ってろ、今行くから」

作業着の上着を羽織り、黄色の安全帽をかぶる。

事務所を出ると、ボーリング機器の傍から湯気がもくもくと上がっていた。

「ありゃあ、今度のは多いな」

「おう、それもな、いつもと違って止まる見込みがねえすら」

3年前の所謂「蜂起の日」以来、アジアとオセアニア以外の世界各国が大混乱に陥り、世界情勢が一変して化石燃料の輸入に限られる現在、日本の発電量の5割強は地熱発電で賄われている。特に難民が増えつつある西日本ではさらなる電力需要の伸びが見込めるため、日本の屋根と云われる中部山岳地帯を中心に新規の発電所建設が急ピッチで進められていた。

だが地下熱の大動脈とも言える中部山岳地帯の破碎工事は、極めて難航していた。ほんのわずか岩盤を破碎しただけで、一步違えば膨大な地下水が蒸気を伴って溢れ出てくる。また火山活動が旺盛で筋を



違えれば一帯の大噴火に繋がりがねないマグマだまりも点在しており、慎重にも慎重を期して工事を進捗したい現場と、一刻も早く電力確保を狙う電力会社と背後の日本政府との間で軋轢が生じることはしよっちゆうだった。

3日前、地均しが完了した九郎ヶ岳において、早速発電機を設置するためのボーリング工事が開始されて以降、1日に1回は熱水噴出が発生し、工事を一時中断する事態が相次いでいた。

事前の地質調査では、熱水脈がすくなく、地表への現出は考えられないという結果を得ていたが、実際にはあり得ないはずの熱水が噴出することで、いよいよ政府からの圧力も高まりつつあったのだ。

「まったく、天然の蒸気圧に上からの圧力。挟まれるオレも、いい加減お煎餅になっちまうよな」

止まらない熱水に辟易しながら、井本はぼやいた。

「しようがねえ。おい、あそこの三段壁あたりに杭打ってな、圧力分散させよう。注意しろよ!」

井本の号令で、ボーリングシヨベルが動いた。水脈が走っていると思われる地下50メートル付近まで穴を掘り、敢えてそこから熱水を噴き出させることで圧力を抜きやすくするのだ。

思った通り、じわじわと湯気混じりの水が滲み出てきた。

「おう、この調子だ。もう少しして杭抜け」

井本が大声で指示を出したそのとき、地面が小刻みに揺れ出した。

次第に揺れは大きくなっていき、三段壁から石が落下し始めた。

「おい監督!まさか火山帯破つちまったかあ!?!」

地響きに負けない声を張り、橋場が飛んできた。

「まさか、そんなハズあるかい!」

「と、とにかく待避だ、待避!」

三段壁の落石は激しさを増し、作業員たちは現場事務所に逃げ込んだ。

全員の安否を点呼で確認した後、中央の休憩所に身を固める。

「妙だなあ、揺れが収まんねえぞら?」

「でもよお、熱水止まったぞ?」

「おい、まさか噴火するんじゃないやねえだろな」

口々に不安を吐露する作業員たち。万が一噴火となれば、このプレハブ造りの事務所ではひとたまりもない。

「全員、ヘルメット着用！」

気休めに過ぎないが、井本の号令で若い衆が全員分のヘルメットを抱えてきた。

ーウオオオオオオー

「おい、何か聞こえねか？」

皆が固唾を呑んで、耳を澄ませる。

ーウオオオオオオー

「何か、猛獣が吠えるみてえな……」

「まさか、怪獣じゃねえぞら!?!」

誰もが心の中で思いつつも、空気を読んで発しなかった単語を、橋場は口にした。

揺れは収まらず、一定の強さで続いていた。

## 第2話

### 漂流

#### ― Exile ―

II

〓 石川県珠洲市

UMA日本支部

トレーニングルーム

〓

投げられた陽次朗は、ゆっくりと立ち上がった。

周りの榛香、スキョン、護はただただ驚きの表情を浮かべた。

軍隊格闘技を完璧にマスターしている陽次朗が、ものの数秒で剣太郎に投げ飛ばされたのだ。それも、相手の手を掴んで一気に振じ伏せる技を使おうとして、まさかの逆襲を喰らってしまった。

陽次朗は悔しげに剣太郎を睨みつけたが、当の本人はどこ吹く風とばかりに手をブラつかせていた。

半ば陽次朗の「新人かわいがり」行事となっている格闘訓練で、あっさり敗れ去るなど前代未聞であった。

息を切らせて座り込むと、陽次朗は榛香に視線を向けた。

榛香はジャケツトを脱ぎ、臨戦態勢を取った。

「おう、次は姉ちゃんか。その様子だと怪我、すつかり良くなっただろ？」

ニコニコしながら、剣太郎も臨戦態勢になった。

「おい新入り、言つとくが女だからって榛香を甘く見るなよ？」

痛めた肩甲骨をさすりつつ、陽次朗が口を挟んだ。

「UMAでの格闘スコアは日本支部最強、全支部でも1、2を争うぞ？」

陽次朗の言葉に、偽りはなかった。陽次朗のように実戦での経験はないが、訓練では陽次朗ですら打ち負かすほど、榛香には天性の能力と実績があった。

榛香はキツと剣太郎を見据えた。どうにもつかみどころがなく、隙

がありそうでなさそうだ。

それでも、榛香は思い切り踏み込み、剣太郎の胸元に拳を叩き込まんとした。

一気呵成。あまりの早さに、陽次郎を始めとするケンカ慣れした相手でもかわすことが難しい正拳突きだった。

だが榛香は思いがけず、勢いが止まった。剣太郎は手のひらで、完全に榛香の拳を受け止めていたのだ。じゃんけんでグーがパーに勝てない、とはこのことか。

一瞬ギョツとしたが、すかさず左手で剣太郎の頬目掛けて拳を振るった。

パン！と乾いた音がした。榛香の拳がクリーンヒットしたわけではなかった。剣太郎に苦もなく弾かれ、それどころか剣太郎の手刀が、いつのまにか榛香の首筋に当てられていた。

榛香は固唾を呑んだ。手刀は榛香の皮膚ほんの少し手前で停止していた。剣太郎は口許に微笑みを湛えているが、榛香は一瞬、強い殺気を感じていた。剣太郎がその気であれば、間違いなく自身の首は弾き飛ばされていただろう。

「もういい。やめようぜ」

手刀を引つ込めると、剣太郎は振り向いてペットボトルの水を飲み干した。

「え……ちよつと、まだ訓練終わってないでしょ！」

詰め寄る榛香に、剣太郎は向き直った。

「いや、やめる。何度やっても一緒だ」

榛香は一気に脳天が沸騰したのがわかった。

「一緒じゃない！次は絶対に……」

目にも留まらぬ速さで、剣太郎は榛香の眼前に人差し指を突き出した。

「やらない理由はふたつ。ひとつは、いくら訓練でも女性をブン殴る趣味はオレに無い。もうひとつ。オレは、自分より弱い相手とは闘わない主義だ」

言うだけ言うと、剣太郎はさっさとジャケットを着て、「腹減った」

とぼやきながらトレーニングルームを出て行った。

「おい貴様！まだ訓練は終わってないんだぞ！」

陽次朗の怒鳴り声も意に介さず、口笛を吹きながら廊下の先へ歩いていく剣太郎。

「まったくあの野郎、上官の言うことが……！」

不遜な剣太郎への怒りに同意を求めべく榛香を見遣った陽次朗は、二の句が継げなかった。歯を食いしばり、わなわなと震える榛香の表情には、どの言葉も投げ掛けられなかったのだ。

背後のデスクに座る冴島は、目を閉じて軽く微笑んだ。

「少し早いが、みんなも休憩するか」

「隊長！」

困惑気味に強い語調の陽次朗に頷きこそしたものの、言ったことは言ったことだ、と無言で伝えた。

「いやあ、剣太郎さんてすごいですね！」

「ホント、めっちゃ強いんですね☆」

一緒に食うかと誘われた護とスキョンは、誘われるがままにカフェテリアで剣太郎と同じ席に着いた。

「どこであんなに鍛えたんですか？」

護の質問に、「ん。まあ、長いこと地下格闘技に出ててな」と答える剣太郎。

「えー！ガチでリアルファイトだったんですねえ！」

「おいおい、そんな大袈裟な。ま、生きるか死ぬか、闘わなければ生き残れない世界だったもんでな。そうそう、オレ年上かもしれないけど、敬語なんて使わなくていいぞ。さん付けもすんなって、なんか照れ臭い」

「えー、じゃあ、剣ちゃん！」

「それがいいーぎっくばらんにいこうか」

盛り上がる3人を、やや離れた席で忌々しげに見つめる陽次朗と、黙ってコーヒーをすすする冴島がいた。

「隊長、あんな礼儀知らずで得体の知れない男を、どうして日本支部に引っ張ってきたんですか？」

「アップルジュースを怒り任せに飲み干して、陽次郎は訊いた。」

「なんだ、不満か？」

陽次郎の質問には答えず、冴島は逆に訊いた。

「ええ。あれほど不遜な野郎な上に、オーストラリア支部で訓練課程に入る前の経歴がまったく不明ときてる。そんな男が、よくもU M Aの試験パスしましたね。しかもあいつ、さつき地下格闘技やってたとか話しましたね？」

「らしいな」

「地下格闘技は、非合法組織の収益源です。犯罪の片棒を担ぐようなものだ。そんなことをしていた奴が、U M Aに所属するのはU M A憲章に抵触するのでは？」

ここで冴島は、ようやく陽次郎に視線を向けた。

「U M A憲章には、在職中の犯罪行為に関する罰則規定があるのみだ。当然入隊前の経歴審査は厳格だがな。ま、オーストラリア支部が入隊を許可したのなら、こちらとしてはとやかく言うこともあるまい。それに、人はそれぞれ、後ろめたい過去があるものだ。陽次郎、君もそうじゃないのかね？」

いつもの微笑みを打ち消し、冴島はじつと陽次郎の目を見つめた。後ろめたい過去、という言葉に、陽次郎は明らかに動揺していた。

「ところで、榛香の姿が見えないが？」

「それが、休憩誘ったんですが、自室へ戻りました。あいつに打ち負かされたことに、かなりショックを受けてたようです」

「ふむ。彼女が落ち込むとはな」

そう言っつてコーヒーに口をつける冴島に、陽次郎は気色ばんだ。

「隊長、やはり自分は、あの男を仲間に加えることに異議があります。あいつが来て、隊の規律が緩んでますし、みんなひっかき回されている。榛香など特に・・・」

ちようどそのとき、隊員招集を告げるアラームが鳴った。

## 第2話

### 漂流

#### —Exile—

#### III

く東京都杉並区高井戸 ファミリーマート高井戸警察署前店く

お客が入店の際に流れるメロディーに反応し、品出しをしている瑛太は「いらっしやいませー」と条件反射的にあいさつした。

入店するなり、自分に近寄ってくるのがわかったが、賞味期限の切れたプリンを下げつつ、知らないフリをした。

「次、あたし動くよ」

こんにやくゼリーを選びながら、入店してきた客・・・ふんわりした栗色の髪をたたえた優希が声をかけてきた。

「九郎ヶ岳だろ。うまくいくのかよ?」

瑛太も品出しの手を止めることなく、訊いた。

「さあ、どうだろ。もう見つかつちやったっぽいしね」

「マジかよ、ヤベーじゃん。どーすんだよUMA動き出したら」

「まあ、最悪やられてもいいやつて考えてる。あいつどーせ捨て駒だし。ま、見ててっつてしかいまは言わないでおく」

「美樹は納得してるのか?」

「まーね。あんたみたいにペナルティつくようなことはしないつもり」

クスリと笑う優希に、瑛太は非難めいた目を向けた。

「でも美樹は許してくれたよ。優しいもん、アイツ」

「それはどうだろ?」

ぶどう味のゼリーとカルピスを手に取ると、優希はレジに向かい出した。

「彼女、けっこう短気だよ。次は慎重にいきな」

「なんだよ、偉そうに・・・」

ボソツとつぶやいたつもりだったが、知らぬ間に近くに店長が来ていた。

「瑛太ア、お前お客さんに向かってなんだ、その口の利き方は?」

「あつ……すみません、すみませんでした」

「だいたいお前、11時のトイレ掃除まだしてねーじゃねーか。さつさとそれ終わらせて掃除にかかれよなあ」

ペコペコと頭を下げる瑛太に、会計を済ませた優希は冷笑をたたえた。

↓石川県珠洲市 UMA日本支部↓

中央司令室に集められたUMA隊員たちは、通信担当の米山から概要を聞き、首をかしげた。

「つたく、こないだの怪獣三匹出現以来、世間ではなんでもかんでも怪獣に結び付けるのが流行ってやがる」

特に陽次郎は悪態をついていた。

「隊長、この調査は拒否しましょうよ。まだ確証もないのに、こんなことで現地へ出向いてなんてやってられない。我々はいざ怪獣が出現してから叩くべきだ」

「陽次郎、まあ待て。我々は武装こそしているが、軍事力行使をするだけの存在ではない。事象やデータから対象を調査・分析することもUMAの大事な仕事だ。それに今回の調査を依頼してきた山忠建設は、UMAへ多大な寄付をしてくれる山忠商事の関連会社だ。大事なお得意様をなくすわけにはいかん」

冴島は得てして笑顔で嗜めたが、陽次郎は不服そうに口をすぼめながらも、目を閉じて頷いた。

「それに、山忠建設はきちんと九郎ヶ岳地下のソナー調査を行って、データを我々に提供してくれている。現地へ行かずとも調査ができるんだ。そう腐ることもあるまい」

「はっ、軽率でした」

不服こそ口にするが、根は軍人根性に支配されている陽次郎は直立して頭を下げた。



「そうですね。あたしみたいに優秀な隊員もいるんですから☆」  
後ろから出てきたスキョンは、言いながら早速モニター画面にタッチし始めた。

「えーつとお、いまからソナーで感知した地底のサーモ画像を出しますね」

山忠建設はソナー感知のデータのみ提供したに過ぎず、スキョンは慣れた手つきでデータをサーモ画像に変換していく。

「ほおー、スキョンはすごいな。こんな簡単に操作できるのか？」

好奇心に満ちた目で、剣太郎が訊いた。

「剣ちゃん、あたしこう見えて地質学と気象学の博士号持ってるんだあ」

「マジかよ、天才じゃねーか」

楽しそうに話す二人を、陽次朗は苦虫を噛み潰すような顔で眺めた。

「おいスキョン。剣太郎はお前より年上だぞ。なんだその口の利き方。そして剣太郎、お前も先輩に向かってその態度は何だ？」

「堅えこと言うなって。UMAは軍隊じゃねーんだぞ」

「そーですよお。あたしは剣ちゃんより先輩。剣ちゃんはあたしより年上。これでお互いevenじゃないですかあ」

グツと歯を食いしばる陽次朗だったが、二の句は告げなかった。議論は苦手なのだ。

「画像出しますね」

言いながらも操作を終えたスキョンは、最後に決定をタップした。

九郎ヶ岳地下の様子が、サーモ画像として映し出された。

「んー、やっぱり火山活動が活性化してると思えないですね。地下の圧力は平常値だし、熱水が充満してるワケでもないです。ただ…この空間の気温が少し気になります。圧力が高まっていないのに、90℃近いなんて」

さらに画像を展開していたとき、「おい、これは？」と陽次朗が声を上げた。

「どうかしました？」

「いや、この形状……スキョン、もう少し画像の精度上げられるか？」  
「んー……これが精いっぱいです」

だがその精一杯の画像で、誰もが陽次郎の言いたいことが理解できなかった。

「これ、岩石にしては不自然な形じゃありませんか？」

護の指摘に、「うん。これ、尻尾だよな？」と、剣太郎が乗った。

「これは、ギールじゃないか？」

陽次郎が誰にもなく訊いた。すかさず護は iPad をタップし、自慢のデータボックスからギールのデータを引っ張り上げた。

「陽次郎さん、これですか？四足歩行の怪獣で、2年前にルーマニアに出現。欧州統合軍と戦闘の末、行方不明になったと……」

「ああ。オレも直接交戦した経験はないが、ルーマニアに駐留してたとき、コイツの話は聞いていた。当時、東ヨーロッパを荒らしまわっていたモングラ―を追跡中、地中埋没爆弾を設置しようとしたら、地中から出てきたのがギールだった」

「それで、そいつはどうなったんだ？行方不明って、なんで行方不明になっただけ？」

訊いてくる剣太郎に邪険な視線を向けながらも、陽次郎はつづけた。

「それが不思議なんだ。地上に現出してから、ギールは暴れ回るわけでも都市部を目指すでもなく、その場に留まり続けた。だが目下展開中のモングラ―討伐戦に邪魔になると判断した統合軍は、10発の新型火炎爆弾で以てギールを駆除することにした。オレは爆弾の搭載までは手伝ったが、その後は別の部隊が駆除を担ったんだが……」  
そこまで言うと、陽次郎は言い淀んだ。

「翌日、ギール駆除部隊からの音信が途絶え、観測部隊がギールのいた村を訪れた。そうしたら、村ひとつまるごと焼けていたんだ」  
「それって、村ごと犠牲にしてギールを退治したんですかあ？」

眉を潜めたスキョンが訊いた。

「いや、いくら破壊力は高くとも、そこまで広範囲に炸裂する爆弾ではない。第一、焼け跡から駆除部隊の車両も発見されている。ギールも

姿を消していたことから、統合軍は何らかの事情で、部隊を巻き添えにしてギールを駆除したと結論づけたんだが……」

「粗末な話だ。死体も確認しないで」

剣太郎の意見はもつともだったが、陽次朗はムキになった。

「当時のヨーロッパはそこらかしこに怪獣が存在していた。オレたちはとにかう、目に見える怪獣から市民を守る必要があった。それに、まともに調査もできぬほど、ヨーロッパは疲弊してしまっていたんだ……」

陽次朗は悔し気に歯を軋ませた。

「と、とにかく、ギールはその後経緯は不明ですが、日本に来ていた。そして日本で眠っていた、ということですよね」

護は空気を換えようと、話をまとめに入った。

「そうすると、コイツ、ギールだっけ、どーするんだ？殺すのか？」

剣太郎の問いに、陽次朗と榛香は目を丸くした。

「当然だろ。怪獣がいるんだぞ」

「でもな、この画像見ると、ギール寝てるんだろ。起こすことないだろう。寝てる限り無害なんじゃないのか？」

「何をバカな、貴様それでもUMAの隊員か？」

「UMAは生粋の軍事組織じゃねえんだろ。いろんな角度から判断するのが筋じゃないのか？」

だんだんと声が大きくなる剣太郎と陽次朗に、「二人とも、その辺にしておけ」と冴島が声をかけた。

「隊長さん、あんたどう考えてるんだ？」

その口の利き方なんだ！と怒鳴りそうな陽次朗を制し、冴島は剣太郎に向き直った。

「早速この結果を、山忠建設に報告する。だが選択肢はひとつ、駆除だ。ギールがこの地中に存在する限り、地熱発電所の建設はままならぬ」

「……怪獣といえど生き物だ。命を大事にしたいところだが……天秤にはかけらんねえ、てワケか」

「そうだ。剣太郎、やってくれるな？」

「・・・もちろん」

「よろしく」

剣太郎の無礼に怒りで鼻息の荒い陽次郎を気にせず、冴島は全員に向き直った。

「UMA日本支部は、いまから出動待機状態に入る。今回は国防軍と協議の上、駆除計画を立案し実行する。用意にかかってくれ」

「「「わかりました！」」」

一旦自室に戻った剣太郎に、深い意識の底から問いかける声が聞こえた。

「剣太郎、やはりUMAへの参加はよしたほうが良い。問題が多い

「いや、問題ない」

剣太郎はフツと笑った。

「民間人の立場だと、怪獣の追跡も観測も難しい。UMAならいざつてとき、怪獣が身近だからな。あんただって、前はなんだかんだ言いつつもシンドー博士と同じことしてたじゃないか」

「君がそう言うのなら。だが、剣太郎。冴島という男、気をつけた方が良い」

「・・・かもな。いくら実績があれど、オレの入隊をあつさり認めただのは、少し腑に落ちない。もし？南極の件’を知ってる、それか知りたがってるとすると・・・」

## 第2話

### 漂流

#### —Exile—

#### IV

く石川県珠洲市 UMA日本支部 中央司令室く

ひととおりの用意を終え、剣太郎は司令室に戻ってきたスキヨンと護に、自慢のベトナムコーヒーを振舞っていた。

「すごいー！なんとも言えないコクと香り！」

スキヨンが感嘆の声を上げた。

「ホントうまいです！剣太郎さん、ベトナム行ったことあるんですか？」

護が訊いてきた。

「ああ。地下格闘技やりながら、世界一周してたんだけど、あつちこつちでいろんな料理とか教えてもらったんだ。これは、ベトナムで会得した特技のひとつだ」

「へえー！いいなあ。もう世界一周なんてできないですもんねえ」

言いながら、護はコーヒーを口にした。

「ねえねえ剣ちゃん、他にどこ行ったのお？」

「世界全部の国だ。マジで」

「ええー!!」

3人で盛り上がっていると、戦闘時着用する特殊素材で仕立てられたUMA専用のフライトジャケットに身を包んだ榛香が入ってきた。

「あ、榛香さん☆」

「おう、二階だっけ。君も、飲むか？」

カップにコーヒーを注ごうとした剣太郎の手を、榛香は止めた。

「三堂、この出勤終わったら、格闘訓練やらせて」

体格的に標準的な日本女性の身長を持つ榛香は、上目遣いで睨むような強い視線を剣太郎に向けた。

「いや、やめとく」

言うど剣太郎はコーヒーを飲み干し、マグカップにお代わりを注いだ。

「やらせて。今度は負けない」

コーヒーに注意を向ける剣太郎の視界に、榛香は身体を食い込ませる。

「なあ、言っただろ。オレは訓練でも女性を殴る趣味はねーし、自分より弱い奴とは手合わせをしない」

「ふざけないで！女だからって遠慮しなくていいから。あたし、負けたくないの」

次第に声を強める榛香に呼応するように、剣太郎の顔からも笑みが消えた。

「いや、お前はオレに勝てない。わかるんだ。だからやめとけ」

背を向けてコーヒーを飲もうとする剣太郎の肩に、榛香は手をかけようとしたが、剣太郎は後ろを向いたまま、その手を払った。

「いま、お前は純粹に手が出た。人間の動きで、思考を上回る身体の動きつてのが一番早いんだ。オレはその手を払いのけた。そういうことだ。何度やっても同じだ」

榛香は全身が硬直し、次いでわなわなと震えながらうつむいた。

「コーヒー冷めちまった。暖めなおしてくる」

そういつて司令室を出る剣太郎。震える榛香に、気まずさ全開のスキョンと護は顔を見合わせた。

「あ、あのう榛香さん……」

どうにか励まそうとしぼり出すように声をかける護だったが、「うるさいッ!!」と強く一喝されてしまった。

あまりの迫力にスキョンと護は身体に電撃が走ったようにビクついた。うつむいたまま司令室を出る榛香と入れ違いで、何かを話しながら冴島と陽次郎が入ってきた。

「おい、榛香どうしたんだ?」

陽次郎が訊いたが、どう返事をすれば良いのかわからず、スキョンと護は沈黙した。

「というか……誰だ、司令室でコーヒーなんか淹れたの?」

陽次郎は露骨に鼻をつまんだ。カフェイン入りの飲料全般が苦手なのだ。

「うん、良い香りだ。ベトナムコーヒーだな」

対照的にコーヒー好きな冴島は、匂いだけで言い当てた。

「剣太郎だな。こんな美味そうなコーヒーを淹れるとは。私の分もあるかな？」

何やら呑気なことをしゃべる冴島に怪訝な顔をするスキョンと護だったが、「だが時間の経った香りもする。コーヒーを一度冷ますほど、おしゃべりに夢中だったようだな」と言う冴島に、目をパチクリさせた。

「えーつとお・・・」

「なんとというか・・・」

説明しようとするスキョンと護を、冴島は制した。

「剣太郎と榛香だな」

「隊長、あの二人、というか剣太郎、かなり問題です。奴が来てから、UMAの秩序が大きく乱れてます。榛香もずっと機嫌が優れない」

食い下がってきた陽次朗に、冴島は笑みを投げかけた。

「ずいぶんと榛香は、剣太郎を意識してるようだな」

「そりゃあ、UMA最強の格闘術を持つ榛香があつさり負けたんです。おまけに、これは榛香が話していたことですが、剣太郎の射撃やハマー操縦の訓練スコアですよ。入隊後の記録によれば、いずれも榛香が入隊したときのスコアを上回っているんです。あいつ、自分のプライドを打ち砕かれたようなものですよ」

「それだけ優秀な男が来てくれたんだ。歓迎すべきだと考えてはどうだろうか」

「そつ・・・それはそうですが・・・」

「それに、いまは出動のブリーフィングが先だ。隊員同士の個人的な諍いはひとまず置いておくでしょう。全員に招集をかけてくれ」

自室に戻った榛香は、デスクにつっぱした。

悔しさともどかしさがひどく渦巻いていた。

イラついていたとはいえ、護を怒鳴ってしまったことはもうしわけ

ないし、何より、剣太郎のことだ。

半ば自分でも、理解はしていた。剣太郎は自分よりも強いと。だがいままでの榛香のキャリアを鑑みれば、とても素直にそう認めることができなかつた。

そしてそんな自分にもつとも腹が立った。

気づかぬうちに、涙が出ていたらしい。榛香は涙を拭くと、スマホの写真を眺め見た。

小学、中学、高校と空手、少林寺拳法の全国大会で優勝したときの写真。大学時代、グレイシー柔術の遠征でブラジルやメキシコへ出かけたときの写真。

あの頃はまだ自由に海外へ渡ることができたし、日本より治安の悪い国もあつたが、少なくとも国そのものは存在していた時代だ。

あのとき交流があつた外国の柔術家や学生たちは、いまでも元気に生きているだろうか……。

だが、悲しみと思い出に浸る時間はなさそうだった。招集を報せる通知があつた。

榛香は涙を拭くと、自室を出た。ほのかに、廊下に香しいコーヒーの香りが漂っていた。

く長野県北部 九郎ヶ岳 西日本電力第四地熱発電所建設地く

発電所建設のために切り開かれた殺風景な瓦場台地の先には、山を崩さなければそうであつたはずのブナ林が広がっていた。

その一角、建設地を仰げる高台には即席のテントが仕付けられ、iPadにもなるラップトップが並ぶ他は質素な造りの前線基地が設けられていた。

そして建設予定地付近、すなわち先日來熱水の噴出が相次ぐエリアでは、迷彩服に身を包んだ日本国防軍の特殊作戦部隊が数名、テキパキと作業をしているのが見えた。

テントに集まつたのは陽次郎に榛香、護とスキョンに剣太郎だつ



た。冴島は基能登半島の基地から司令を下す役割だった。

「あれ見てみる。欧州統合軍が開発した、対怪獣戦用の指向性大型爆弾だ。アレを怪獣が踏むと、怪獣に向けて衝撃波を集中させた爆発が起こる。威力集中型だから、浴びせられた方はたまったものじゃない」

国防軍が作業する様子を見ながら、陽次朗が解説する。

「しかし、おい、せっかくのオレの初陣だったのに、オレたちは国防軍のサポートかよ」

やや冗談めかして、剣太郎が肩をすくめた。

「日本初の怪獣戦闘をオレたちに取られて、国防軍も存在感アップに必死なんだ。彼らの気持ちもわかってやれ」

ややムキになって反論する陽次朗に「お前のそういうマジになりやすいとこ気にいったぜ」と皮肉半分に剣太郎は返した。

冗談を解さない陽次朗は青筋を立てたが、怒りを抑えながら口を開いた。

「いいか、もう一度確認だ。国防軍が指向性爆弾を設置次第、ギールの潜む地下空間に気化爆弾が流し込まれる。爆発のショックで地上へ現出したところへ、オレたちがハンマーと地上の双方でギールを地雷区域へ誘導する。あとは、巨体に反応する爆弾が連続してギールに炸裂する。いいな？」

そんなことわかってる・・・陽次朗以外の全員が言いたかったが、ここは押し黙った。

ちようどそのとき、国防軍から指向性爆弾設置完了の合図が出された。特殊部隊の面々が撤退していき、工兵を乗せた別の車両が立坑がそびえる付近へ走り、地下へ向けて気化爆弾を流し込んでいく。

「よし、作戦開始だ。護、オレとハンマー1号機へ。榛香は2号機を頼む。スキョンはここで定点観測だ。で・・・剣太郎、お前本当に地上の誘導任せて大丈夫なんだな？」

陽次朗は鋭い目を剣太郎に向けた。

さきほど基地内でブリーフィングの後、剣太郎は格納庫の傍らにあるUMA専用のバイク、通称チョッパ（ホンダ・スパーボールド

ル)に注目した。

「オレはバイクが良い。昔バイクでインドからサウジアラビアへ走ったし、一番気分が乗る。それにオレは医者だ。チョツパーで名前、他人とは思えなくてな」

そう言っつきかなかつたのだ。

「機体に好みは禁物だ！」と陽次朗は強く抗議したが、山岳地帯という地形条件を鑑みれば、UMA車両であるサルトプス(日産エクストレイルを改造)よりはチョツパーの方が走破性が良い。また4足歩行で頭部が低い位置にあるギールには、地上からの陽動も有効という結論に至った。

「任せろって。カラコルム山脈に比べれば、険しきは初心者コースだ」

ドン、と胸を叩く剣太郎に、フン、と陽次朗は鼻を鳴らした。

「よし、作戦開始だ」

陽次朗は護を連れて、近くに駐機してあるハマー1号機へ向かった。連れられる護は「2号機が良いのに・・・」と目が物語っていた。

ヘルメットをかぶり、榛香は目線を剣太郎に向けた。剣太郎は気が付かないのか、レーザーライフルのエネルギーをチェックしている。

顔を背け、榛香は2号機へ走った。

「剣ちゃん、気をつけてね」

テントから、スキョンは声をかけた。

「おう。スキョンもな。ここまではやって来ないと思うが、念のため、な」

言うど、剣太郎はチョツパーのエンジンをかけた。

立坑からやや崖寄りから猛烈な土煙と爆音が上がった。

続けて地面が盛り上がり、雄叫びを上げながらギールが地上に現れた。

「大人しく眠ってもらいたかつたぜ」

剣太郎はつぶやくと、テントから伸びるなだらかな崖をチョツパーで一気に駆け下りた。

## 第2話

### 漂流

#### ― Exile ―

#### V

土砂と土埃を払いながら、ギールは雄叫びを上げた。

長い間地中で過ごしていたせいか、地表に無理矢理現出して戸惑っているようにも見える。

そんなギールに、陽次朗たちはハマー二機編隊で上空から接近する。

「レーザーパルスでくたばってくれたら良いんだがな・・・」

眼下のギールを仰ぎながら、陽次朗はつぶやいた。

「それは望めませんよ。地中で炸裂した爆弾は陽動とはいえ、あれほどの巨体を持ち上げるだけの威力を持っています。にもかかわらずギールにダメージは見当たりません。爆風と収束高出力光波を一概に比較できませんが、とても有効とは思え・・・」

隣に座る護は、陽次朗の強い眼差しに口をつぐんだ。しまった、余計なことを言わなければ・・・。

おそらく陽次朗なりに、雰囲気を軽くしようとしたのだろうが、口から出る言葉すべてがマジレスである、あるいはそう受け取られる。

並びのкокピットの空気を察した榛香は軽く咳払いすると、「旋回後、各自攻撃で良いね?」と訊いた。

「ああ」

陽次朗は短く答える。ギールはちょうど、二機の真下だ。

やや進んでから、ハマーは大きく旋回した。角度を下げ、砲門をギールに向ける。フロントに表示された画面には、照準がピタリと当てはまっている。

「発射」

陽次朗の合図で、計4問のレーザーパルスが発射された。いずれもギールの背中に命中、勢い良く白煙が昇る。

もう一度旋回すると、ハマーは同じ角度でさらに攻撃を加えた。以前都市部に出現したアーストロンなどは二足歩行だったが、今回のギールは四足歩行。相手と同じ高度で飛行することはできない。山岳地帯の中という事情もあり、どうしても航空攻撃は上空からの滑空

しか手段が講じられない。

立て続けに背中を焼かれたギールは、大きく吠えながら上空を仰ぐ。3度目の攻撃直前、大きく身を振って攻撃をかわした。地面に刺さったレーザーパルスは土砂と岩石を炸裂させるにとどまった。

「くそつ、おい三堂、地上からの陽動だ」

インカムで指示を出すと、崖を降りたチョッパーは悪路もおかまいなしにギールへと向かう。

比較的なだらかな箇所まで来ると、チョッパーを走らせたまま剣太郎は両手でレーザーライフルをかまえた。

「おい、お前何やって・・・!?!」

機内のカメラで様子を見ていた陽次朗だったが、手放しで走りながらも剣太郎はギールの顔面にレーザーを撃ち当てた。

「信じられん、まさか・・・」

誰もが驚く中、『馬術撃ちだ。モンゴルで習った。那須高原で流鏑馬もな』という返事をよこす剣太郎。

強固な背中への攻撃と違い、突然鼻つ面にレーザーを当てられたギールはいきり立った。振り向いた顔面に、2発目が照射された。火花が弾けるように火花が散り、のたうちながらもギールは剣太郎のチョッパーに向かってきた。

『剣ちゃん気をつけて！そのまま500メートル前進させて！』

スキヨンのナビゲートに従い、剣太郎はチョッパーを吹かした。怒りに任せたギールの接近で地面が波打つものの、剣太郎は巧みにチョッパーを捌き、悪路を走破していく。

『間もなく地雷源、剣ちゃん退避して！』

「OK」

剣太郎はチョッパーを一度止め、前方へ向けて信号弾を撃った。ネズミ花火のように地面で転げ回る信号弾へギールは注意を向けた。その隙に剣太郎は山の尾根を駆け上がる。

標高を稼いだあたりで、2発目の信号弾を撃つ。ギールは猫じやらしに飛びつく猫のように前足を繰り出す。

『地雷源まであと70メートル』

スキョンがモニターを見ながら言った。

「くそ、信号弾がもうねえ」

『よし、任せろ』

即座に陽次朗は機体を繰り、急降下してやや狭量な尾根の谷間に機体を滑らせた。突然のアクロバット飛行に、同乗する護は顔を引きつらせた。機体と一緒に、胃や腸もガクンと高度を下げる感覚はいくらこなしでも慣れない。

ハマーに気を取られたギールは、足を一步二歩と進める。

刹那、指向性地雷が爆発し、ギールの腹部に続々と猛烈な爆風が直撃した。

白煙と土煙が膨れ上がりながらも、第二、第三の地雷源に足を踏み入れたギールには休む間もなく強烈な衝撃波が当てられた。

あまりの威力に、剣太郎はさらに尾根を上がった。先ほどまで居た中腹が砂埃の嵐に隠れてしまった。

「火薬量間違えてねーか？」

谷間が見えなくなる程の爆煙が落ち着いてくると、粗い息づかいをしながら尾根にもたれかかるギールが見える。

上がる息が落ち着いたのか、ギールは鋭い前脚の爪で尾根を搔き出し始めた。地中に再び潜り込もうとしているのか。

「垂直攻撃に移る。三堂、離れて」

逃げようとするギールを、榛香は見逃さなかった。一度垂直に高度を稼ぐと、宙返りをして上ってきた空を降り始める。

降下速度に制動をかけながら、榛香はレーザーパルスを撃ちまくった。機種の手に見えるギールにレーザーが降り注ぎ、ギールは尾根から滑り転げた。尾根伝いに退避していた剣太郎は、地響きの強さにハンドルをきつく握る。

滑りながら、尾根同士の谷間に仕付けられた指向性爆弾が横向きに爆発した。連鎖的に、反対側の尾根からも爆発の波がギールをおそう。

「見てみる。従来対怪獣戦には焼夷弾や火炎爆弾が用いられてきたが、焼殺よりも爆殺が有効とされた欧州戦役の結果を踏まえた爆弾

だ。目に見える炎こそ上がらないが、一瞬に炸裂する炎の強さは最新建材のビルすら軽々と粉碎する」

得意げに語る陽次朗だったが、隣席の護は青い顔をしてうつろな目をシヨボシヨボさせている。尋常ではないアクロバット飛行で気分を崩し、エチケツト袋を両手で抱えている。

およそ1分近く、次々と爆発した後、先程を上回る爆煙が膨大な塵と共に地面に舞い降り始めた。ギールの姿は望めない上、今度は啼き声も聞こえてこない。

「・・・やったの？」

榛香が誰にともなく訊いた。

「三堂、確認できるか？」

陽次朗が訊いた。

「いや、モクモクで見えない」

「スキョン、モニタリング可能か？」

しばらくキーボードを叩いたが、『ダメです、もう少し煙が晴れないと』という返事だった。

すう、つと、谷間に冷たい風が吹いた。剣太郎が空を仰ぎ見ると、富山県側から急激にガスがかかり始めている。

その風で、尾根の谷間に滞留する土煙がやや晴れた。

「粉々になったんじゃないか」

陽次朗の期待は空振った。大地に仰向けになって転がるギールが確認できた。

だがクリーム色の全身に、一点だけ激しく違和感のある箇所があった。それまで見えなかったギールの腹部だ。ちょうど腹部中央に、真紅のまるいコアが確認できた。穏やかな体色にそぐわぬ、いまにも燃え上がりそうな赤く熱いコアだった。

## 第2話

### 漂流

#### ― Exile ―

#### VI

「なに、あれは……」

ギールの腹部を、榛香は訝しげに見ている。

「心臓とかか？ならあそこを叩けば……」

だが陽次朗の楽観的な希望は、「いけない！」という護の声にかき消された。

「腹部のコアに高エネルギー反応です、そのう、形容しづらいのですが」

『みんな気をつけて！火山噴火の前兆に似てます』

「それです、それ！」

スキヨンのインカムに、護が反応する。

その頃地上の剣太郎は、望遠カメラでギールの様子を窺っていた。

「おいなんか妙だぞ。アイツ目が真っ赤だ」

「だからどうした」

陽次朗のツツコミに、「怒り心頭って感じだぞ」と返事をする。

「貴様の主観で語るな、他に異常は？」

カメラを周囲に向けると、崩れた尾根に混ざる木々が湯気を発して、しばらくすると自然に発火した。

「おい、ギールの周囲が燃え上がってるぞ」

『剣ちゃん離れて！ギール周囲の温度が急上昇してる！』

スキヨンの声に、剣太郎はチョッパにまたがると、さらに隣の尾根へ向けて走り出した。

仰向けだったギールは、不器用ながらも前脚を繰り、突然後脚を軸に二足歩行となった。

全身が熱を発し、空気が歪むのが肉眼でも確認できた。コアはさらに熱を増しているようで、いまにも破裂しそうだ。

「よし攻撃再開だ」

陽次朗は機体を翻し、レーザーパルスを当てたがギールはまったく怯まない。

「……まさか。陽次朗さん、かつてギール討伐のとき、村ひとつ焼け

ていたって話してましたよね?」

「それがなんだ?」

「アレが、その原因かもしれないませ・・・」

護は最後まで言葉を出せなかった。ひとときわ大きく吼えたギールは、腹部から燃え盛るようなコアを吐き出した。

狭量な谷間に激突したコアは、一撃で地形を変えてしまった。そして撃ち出されるコアは1発ではなかった。堰を切ったようにコアから射出されるそれは、超高熱の火炎弾、マグマ弾ともいえるものであった。

赤く染まる土砂が舞い上がり、谷間の地形が変わっていく。

怒りが収まらないのか、ギールはマグマ弾を撃ちながら身体の向きを変えた。剣太郎が登った尾根が燃えながら噴き上がり、一気に山林に火がついた。

剣太郎はちょうど、尾根と尾根の谷間に達していたため直撃は避けられた。さっきの場所にいたとすれば、間違いなく尾根ごと吹き飛んでいたことだろう。

剣太郎の頭上を、何発もマグマ弾が飛んでいく。そのマグマ弾は、当初安全と思われていた建設途中の地熱発電所や工事事務所にまで到達し、数秒のうちに爆破炎上させてしまった。そこから広がるブナ林にも撃ち込まれ、炎のカーテンが出来上がる。

九郎ヶ岳の森林限界地点にもマグマ弾が突き刺さり、大量の土砂が燃えながら崩れてきた。剣太郎は慌ててチョッパを吹かし、必死に山崩れから逃れる。地形が著しく変わってしまい、うまくタイヤが進まない。

「なんてことだ・・・」

上空の陽次朗は呆然とつぶやき、榛香は絶句していた。下の景色は、荒涼とした岩場と深い森から一変していた。猛烈な火災が巻き起こる、真っ赤な煉獄となっていた。まるで地の底に広がる地獄を仰ぎ見ている気分だった。

怒り任せの暴虐は、スキョンがいる前線にも達した。尾根が吹き飛ばされ、一瞬で森林が発火する。



ブナの葉、枝に炎が伝播し、スキヨンは慌ててiPadをつかむと、テントから飛び出して倒れるように身を伏せた。テントが一気に燃え上がり、ボロボロと崩れてきた。

安堵して息を吸い込もうとしたとき、口内が空気に貼り付くような感覚がした。高温の空気が、容赦なくスキヨンの呼吸器を焼こうとしているのだ。

頭上では葉が燃え上がり、ポロポロと落ちてくる。必死で特殊フライトスーツからハンカチを取り出し、口と鼻を塞ぐ。まともに呼吸すれば気道熱傷で呼吸困難を起こしかねない。

『スキヨン、スキヨン!?!』

インカムから榛香の呼ぶ声がした。

『スキヨン、大丈夫か!?!』

陽次郎の声も焦りが滲んでいる。

「・・・助けて。炎に巻かれて・・・」

絞り出すようにインカムに喋りかけるスキヨン。地面スレスレに鼻と口を向け、どうにか呼吸する。

UMAの特殊スーツは耐火耐熱素材で作られてはいるが、この火災で空気が熱せられては、いつまで呼吸が持つかわからない。ヘルメットから頭に熱が伝播してきた。

『おい三堂、スキヨンを救出できるか!?!』

陽次郎が怒鳴るように問いかけた。

「待ってる、いま向かってる!」

スカーフを口と鼻に巻きつけて覆い、剣太郎はチョッパーを駆り出していた。スキヨンがいるはずの陣地へ向けて崩れた土砂を登っていく。

ギールの暴走はとどまることを知らず、火災の渦はますます拡大していく。

燃え上がるブナ林の中を進むと、スキヨンがいたテントが見えた。燃えて崩れ去っており、近くの地面にスキヨンが横たわっていた。

「おいスキヨン!」

スカーフで覆っても熱が伝わってくる中、剣太郎はスキヨンを抱き

起こした。酸欠状態なのだろう、呼吸が粗く意識が混濁し、おぼろげな視線を向けてきたかと思うとフツと目を閉じた。

早くここを離れ、新鮮な空気を吸わせなければスキヨンの命が危ない。だが火の手は広がっており、幹に着火したブナが続々と倒れてくる。剣太郎自身、呼吸がおぼつかなくなりつつある。だがスキヨンをチョッパリーに乗せたところで、安全圏まで退避できるかどうかはわからなかった。

『三堂、スキヨンは大丈夫なのか!?!』

陽次郎が焦り気味に訊いてきた。

「・・・ああ、なんとか脱出してみる」

嘘だった。2人とも助かるとは思えなかった。

『できるのか!?!いま消火剤を搭載したF22を要請したところだ!?!どうにか持ち堪えられるか?』

「通信状態が良くない・・・」

そう言っつてインカムを外すと、剣太郎は首から下げたデルタプラズマーを掌に乗せ、目を閉じた。

紫色の光を発するデルタプラズマーを軽く握り、剣太郎は目を閉じた。すうつ、つと意識が光の中へ吸い込まれていき、弾き出されるように光が溢れ出す。

炎上する大地に、ウルトラマングレートが立ち上がった。火の手が及ばぬ森林帯に気を失っているスキヨンを降ろすと、グレートは高くジャンプした。

「ウルトラマン・・・!」

上空の陽次郎がつぶやく。

『陽次郎、どうする?』

榛香が訊いてきた。

「少し様子をみよう。一時離脱し、スキヨンと三堂を救出だ」

二機のハマーは高度を上げた。飛び上がったグレートは怒り狂うギールのそばに着地する。コアからのマグマ弾を止めたギールは、突然の闖入者にいきり立つ視線を向けた。

## 第2話

### 漂流

#### ― Exile ―

## VII

「デアアツ―」

グレートはギールに向かった。ギールも雄叫びを上げつつ迫り来る。

がっぷりと組み合い、互いに力を出し合って牽制する。ギールの前に生えた爪は鋭く、グレートに食い込んだ。

かまわずグレートは押し込む力を込め、ギールは仰向けに転倒した。二足歩行で立ち上がるギールの顔めがけ、回し蹴りを打ち込む。ふらつきこそしたがギールは踏ん張った。そこへ、返す脚でさらなる回し蹴りが放たれた。

ダメージが大きく、再び転倒するギール。ギールの腹部が熱を帯び始めた。

グレートは滑り込み、マグマ弾の死角となる位置からギールの首に手を回した。右手でギールの首を締め付ける。

かすれた咆哮を上げ、苦しげに身体をバタつかせる。グレートは腕により力を込めた。

腹部のコアはいまにも炎が上がりそうだが、その位置からはグレートに当たるはずもない。ギールの口から泡が出てきた。

このままヘッドロックでギールを締め落とそうとしていたとき、ギールは目を赤くギラつかせた。首を反らせてグレートを睨みつけると、口から焰を噴いた。

上半身が焰に包まれたグレートは、思わず手を放して転げ回った。頭を振って意識をはっきりさせたところに、四足歩行状態でギールが突進してきた。

グレートの両膝がしたたかに打ち付けられ、山の尾根に倒れかかった。ギールはグレートの左脚に噛みつき、先ほどの逆襲とばかりに歯を食い込ませた。

「グアアツ」

グレートの強固な皮膚はギールの歯こそ拒むが、痛みに喘ぐグレートにギールは全体重をのし掛けてきた。

ギールの重みに加え、グレートの腹部にマグマコアが直に当てられる。超高熱はグレートの皮膚を焼き、白煙が上がり始める。

グレートの胸にあるカラータイマーが鳴り始めた。大気汚染の激しい地球では、ウルトラマングレートはその巨体を3分間しか保つことができない。否、変身後3分も経過してないのだが、周囲の激しい火災で酸素が奪われている上、もうもうと昇る煙が大気を汚染することでグレートの変身可能時間は限られてしまっていたのだ。

グレートは力を振り絞り、ギールの腹部に両手を当てた。全身のエネルギーを両手に集中させ、気合いを入れて放出する。両手からの光弾、ナックルシューターのゼロ距離射撃だ。

破裂したように煙が上がり、ギールは真上に吹き飛ばされてひっくり返ってしまった。かなりダメージを受けたらしく、仰向けでのたち回る。

立ち上がったグレートは大きく呼吸をすると、より強力な光弾でギールを屠るべく自身の腕へさらなるエネルギーを送り込んだ。

ー待ってくれー

そのとき、合体している剣太郎が意識下から声を上げた。

「どうしたのだ、剣太郎」

両腕にチャージしたエネルギーをそのままに、グレートは訊いた。

ーコイツを倒すのはやめてもらえないかー

「何を言い出すのだ」

ーコイツ、怒りで見境いなくしてるだけで、本来は地底で大人しく眠ってるだけの怪獣だと思うんだ。しかも、昔住処だったヨーロッパを追われ、きつとここに逃れてきたんだろう。ようやく安住の地だと安心していたら、オレたち人間に「そこに居るだけで」眠りを妨げられたから頭に来てんだと思う。どうにか、地の底へ戻してやることはできないか？ー

「それはできない。この怪獣はもはや話が通じぬほど怒り狂っている。倒す以外に選択肢はないのだ」

ーグレート、頼む。この地下には巨大な空洞が拡がっている。アロービームで、地中に穴を開けてくれ。筋道さえ作れば逃れてくれる

かもしれねえー

「剣太郎」

「オレ、なんだかコイツがかわいそうなんだ。オレも住んでた場所を迫害されて、当ても無く漂流するしかなかったことがある。迫害された怒りと先が見えない不安で、ささくれ立つ気持ちがよくわかるんだ」

グレートは両腕に溜めたエネルギーを放つことなく、腕を下げた。だが怒りに燃えるギールは立ち上がり、大きく吼えてからマグマ弾を連発してきた。放出された弾はすべて、グレートに向かった。

身体に直撃する寸前、グレートは両掌ですべてのマグマ弾を受け止めた。数発のマグマ弾は焰を巨大化させ、グレートの上半身を上回るほどの大きな火球となった。

火球の禁にある大地が熱され、融解してしまうほどの超高熱弾を、グレートはギールに押し返した。相手の放つ技を受け止めた上で増幅し、数倍にして返す技、マグナムシユートだ。

巨大な火球が直撃したギールは断末魔の叫びを上げる間も無く、派手に砕けながら炎に包まれてしまった。火球の余波はギールだった破片を呑み込み、跡形もなく燃やし尽くした。

グレートは大きく息をすると、あちこちで捲き上る煙を振り払うような高速で天へと飛んでいった。

陽次郎から要請を受けて飛んできた国防空軍のF22編隊が上空から消火剤を巻く中、一時的に着陸した陽次郎と護、榛香は消息を絶ってしまった剣太郎とスキョンを探していたが、火災現場から遠く離れた山林地帯から一筋の煙が上がったことを確認すると、急ぎ煙の元へと向かった。

救難時の信号となる黄色い発煙筒が焚かれる中、剣太郎が横たわるスキョンに携帯酸素を吸わせているところだった。

「無事だったか」

陽次郎が駆け寄ると、剣太郎は頷いた。

「スキョン?」

榛香はスキョンに駆け寄った。顔は煤で黒く染まり、酸素ボンベを付けた顔は意識が完全に覚醒していないのか、ぼんやりとした表情だった。

「大丈夫です、剣ちゃんが助けてくれて」

スキョンはいつもの明るい笑顔を見せたが、喋った途端に咳込んだ。

「まだ喋らない方がいいな。気道が焼かれてるかもしれない。でもまあ、このボンベしばらく吸って喋れるようなら、さほど深刻な状態じゃない」

剣太郎は咳込むスキョンに酸素ボンベを当てた。咳込みながら、スキョンは剣太郎に笑いかけた。

「それにしてもお前たち、あの火災をよくここまで逃げて来られたな」陽次朗が剣太郎に訊くと、「ああ、オレだけじゃ無理だった。火災がひどくて立ち往生したところを、グレートが助けてくれたんだ」と答えた。

「グレート、だと?」

「なんですか、グレートって?」

怪訝な表情で、陽次朗と護が訊いてきた。

「あのウルトラマンの名前だ。ウルトラマングレート。オーストラリアじゃ、そう呼ばれていた」

剣太郎は視線を空に向けた。天に飛び去ったグレートを追うかのような視線だった。

「ウルトラマン・・・グレート?」

「グレート・・・」

陽次朗と護はグレートの名を反芻した。ウルトラマンという名前を耳にしたスキョンは、それまでの笑顔を曇らせた。

ギールを撃破した翌日、ベトナムコーヒーの香り漂うUMA司令室にて。

冴島は剣太郎が淹れたコーヒーをうまそうに飲みながら、自身のiPadでネットニュースを見ていた。

【経済産業省、西日本電力第四地熱発電所建設の無期限延期を決定】

【怪獣は仕留められなかったのか 国防軍の作戦展開に非難殺到】

隊長デスクに腰掛ける冴島の他には、自身のデスクで物憂げにコーヒーを飲む剣太郎が居るばかりだった（コーヒーが苦手な陽次朗は、機体整備補助と言い残して司令室を出てしまった）。

コーヒーにミルクを注ぎ、ゆっくりと白く渦巻く様子をぼんやりと眺める剣太郎。冴島はチラリと視線を送るが、敢えて声を掛けることはしなかった。

「剣ちゃん！」

やや重苦しい雰囲気打ち消すかのように、スキョンが元気に入ってきた。

「おうスキョン、どうだ調子は？」

「うん、食べたり飲んだりするときにちよつと喉の奥が痛いだけ☆それよりどうしたの剣ちゃん、なんか元気ないよ？」

「ん？いやそんなことないぞ。オレはいつだって元気だ！」

声の張りが戻った剣太郎を見て、少し怪訝な顔をしたもののスキョンは微笑んだ。

「それより、またコーヒー飲むか？昨日と違うフレイバーにしてみたんだ」

「ホントー？飲む飲む てかき、いまマモーがカフェテリアでご飯食べてるから、持ってって一緒に飲もうよ！」

賑やかに出て行く剣太郎とスキョンを、反対側の入り口から恨めしげに見る榛香。少し歯齧みをする、iPadで格闘技の映像を観始めた。

真剣に、食い入るように映像を見る榛香。冴島は席を立ち、榛香の背後に立った。

「どうしても剣太郎に勝ちたいようだな？」

冴島の声かけに、榛香は振り向くことなく頷いた。動画に集中させて、そう心の声が聴こえてきたが、冴島はかまわず続けた。

「だが勝負どころか、いくら君が頼み込んでも彼は、女性だから、自分より弱いから」と一戦すら交えさせてくれないようだが」

今度は榛香が振り向いてきた。怒りを帯びた目だった。

「榛香、君は彼に勝ちたいのか。それとも、とにかく手合わせしてほしいのか」

「・・・両方です。なのにあいつ、あたしがいくら頼んでも・・・！」

榛香は動画の再生を止め、歯噛みした。フフ、と微笑む冴島に「何がおかしいんですか」とトゲ混じりに訊いた。

「榛香、気を悪くするだろうが、いまの君ではまず剣太郎には勝てない。剣太郎もそれがわかってるから、君の頼みを断るんだ」

「・・・じゃあどうしろっておっしゃるんですか！」

声を荒げ、感情的に立ち上がった榛香に、冴島は人差し指を突き出した。

「落ち着くんのだ。どうだろう、頼み方を変えてみては。剣太郎と戦いたいのだろうか？」

つり上がった榛香の眉が、やや下がった。

カフェテリアに入ると、彼がどこにいるかすぐにわかった。自作のコーヒーを振る舞いながら、護とスキョン相手に談笑していたからだ。

「それでなあ、インドのバナナシに行ったとき、赤い洗面器を頭に寄せた男が・・・」

笑顔で喋っていた剣太郎は、ツカツカと歩み寄る榛香に気がつくとも尻尾を上げた。ワクワクと話に聴き入っていた護とスキョンは、気まぐすそうに顔を背けた。

「おい二階、その顔はまた戦ってくれて頼みにきたのか。何度言わせるんだ」



強張る榛香の顔を見て、剣太郎は機先を制するつもりで口を尖らせた。

だが榛香は顔を強張らせたまま、勢いよく頭を下げた。あまりに力強いお辞儀に、剣太郎は言葉を失った。

「三堂お願ひ。私に武術を教えて」

普段の気の強さからは想像もできない榛香の行動に、護とスキョンは目が丸くなった。

「もつと、強くなりたいの」

頭を下げたまま、榛香は絞り出すような声を出した。剣太郎はやや呆気にとられつつも、そんな榛香を凝視したまま黙り込んだ。

「そうじゃない、オレが首筋狙ってきたら、片足を軸に半身を下げる」  
数分後、トレーニングルームで剣太郎から手ほどきを受ける榛香の姿があった。

「上半身だけ反らせるよりも、半歩下がるんだ。そうすれば確実に身体に当たらないし、反撃もやりやすくなる」

言われた通り、榛香は動く。これまで学んできた空手や少林寺拳法、はたまたU M Aの基本格闘技であるマーシャルアーツにもない、極めて実践的な技法だった。

「よしいいぞ、その調子だ。パンチはそのタイミングで良い」

教える剣太郎も、教わる榛香も汗だくになっていた。傍目から見ても、真剣さが伝わってくる。

「冴島隊長、なかなか活きの良い若者を入れましたな」

トレーニングルームの端で、冴島と共に様子を見る米山 光吉

(ヨネヤマ コウキチ) が声をかけた。

「いやあ。ま、これで隊内の和ができてくれればありがたいですな」

冴島は微笑んだ。

「彼が来てU M Aがまとまってくれたなら、来るべき時にも備えられる、そうお考えになったのじゃありませんか？ いやなに、お答えは不要ですが」

なおも微笑む冴島。米山の問いはまんざらの外れではなさそう  
だった。

### 第3話

目を覚ませ、男なら!

大ガニ怪獣ガンザ

大ダコ怪獣タガール

登場

東京都目黒区中目黒5丁目  
美容室『La Ruell  
e』

「いらっしやいませー」

元気よく挨拶した優希だったが、顔を見て笑顔を曇らせた。

「まあ、いらっしやいませ安蘭様!」

レジ操作をしていた店長の中尾が猫撫で声を上げた。

「店長、優希ちゃんをよろしく」

指名された以上、イヤでも出なくてはならない。優希は聞こえぬように舌打ちすると、精一杯の営業スマイルを浮かべた。

「安蘭様、ようこそお越しくございました!」

「いつものように、お願いね」

頭を下げたところに、上から声をかけてくる。優希は頭を上げるまで顔をしかめた。

「それではシャンプーから参ります。どうぞ」

カット台から仕切りを挟んだところにあるシャンプー台へと案内した。仕切りが個室状態になっており、声の大きさにもよるが外に漏れづらい構造だ。密談するには良い環境だった。

「こないだ、優希ちゃんの案件、大成功だったそうじゃない?」

シャンプーを始めるタイミングで、安蘭が訊いてきた。言葉の中身とは裏腹な、安蘭らしい上から目線の言い振りだった。

「ええ、まあ」

普段なら感情的に言い返すところだが、今回安蘭は客だ。優希は苦笑いで答えた。

「すごいよねー、地熱発電所建設止まっちゃって、関西で電力不足が大いに危惧される、とか、仮設住宅への電力供給担保なくなって政府が

打ち出した難民受け入れも雲行き不透明、国際社会からの非難免れぬ、とかき。派手にやったよねえ」

「まあ、ギールはヤラレちゃいましたけどね」

「やっただあ、あんなの捨て駒でしょ。目的は果たしたんだから良しとしなきゃ。ま、でもあたしの案件はその点、存在すら認知されてないから、まだ伸びしろあるけどね」

一瞬、シャンプーの手を止めてしまった。安蘭に動揺を悟られてしまった。

「優希ちゃんの仕掛けた地熱発電所のニュースより、今朝は日本海の記録的不漁がメイン扱いになってるもの。美樹ちゃん機嫌良かったわあ」

ドヤ顔で微笑む安蘭を無視し、「シャンプー流しますね」と声を掛ける。肘を温度調節に『うっかり』当ててしまった。

「ぎゃああー！」

店内に安蘭の叫びが響き渡る。店長の中尾がすっ飛んできた。

「安蘭様！ちよつと優希ちゃんどうしたの!？」

「もうしわけありません！温度調節間違えてしまいました！」

90度のお辞儀をする優希はしかし、したり顔で舌を出していた。

「しつかりしなさい！大切なお客様が火傷なさったらどうするの!？」

「ああ、店長さん。大丈夫だから。誰にでも間違えはあるから」

深々と頭を下げる中尾と優希。無理やりに微笑んだ安蘭だったが、中尾が去った際目があつた優希に、刺すような視線を向けた。

### 第3話

## 目を覚ませ、男なら!

II

く福井県美原市

越前丹後漁港く

岸壁から太い針金のようなセンサーを海面に投入し、剣太郎はセンサーのスイッチを入れた。

海水成分が即座に検知・分析されたものが、石川県にあるUMA日本支部司令室に転送され、データとして表示される。

「スポットD、漁海岸壁だ。スキョン、異常はないか?」

剣太郎はインカムに向かって訊いた。

『んー、ここも特に異常はないなあ。海水成分は一般的だし、海中のゴミやプランクトンが多いこともない、全部正常値』

剣太郎はセンサーを引き上げ、ため息をついた。

「おい、AからDまで全部検査したけど、異常ないってことだぞ。どうする?」

『んー、念のため、市内流れる2つの河川あるでしょ?そこも検査した方が良いかも。山から有害物質が流出してるとも限らないし』

「おし、わかった。検査するときはまた連絡するぞ」

『OK☆あ、ねえねえ剣ちゃん、さつきね、あたしがやつてるY o u T u b eチャンネルに、響乃安蘭ちゃんから書き込みあったの!』

「響乃安蘭て、あのファッションモデルのか?」

『そう!でね、あたしのメイク参考にして今度のファッションショー出てくれるんだって!もうメツチャ嬉しくて!☆』

「すごいなスキョン!またメイクの仕事増えるかもしれないな!」

ちようどそこへ『ちよつとごめん』と榛香が割り込んできた。

『三堂、用件済んだらすぐ調査にかかって。この通信は私語禁止なんだから』

やや怒りを含めた口調だった。

「お前学級委員長かよ。わかったわかった」

そう言つて剣太郎はインカムを切った。榛香は唇を噛むと、スキョンに向き直った。

「スキョン、あんたも必要なことだけしやべりなさい。無駄話は休憩中だけにして」

「はあ〜い」

ピシヤリと言われたスキョンは気だるそうに返事をする、つまらなそうに頬を膨らませた。

「隊長、やはり今回の不漁は、怪獣とは関係ないのでは？」

榛香は隊長デスクに座る冴島に訊いた。

「これだけの範囲を検査しても、怪獣由来と思われる体組織などの成分も検出されませんでしたし、国防海軍の探索調査でも、怪獣は発見されませんでした。これだけのデータがそろった以上、特に異常なし、日本海の漁獲不漁は別な要因を検討。そうした結果を出すべきではないでしょうか？」

「陽次朗さんからです」と、護がかぶせてきた。

「ハマー搭載の検知器による海中調査にも、異常は見られないのとこのことです」

冴島は頷くと、顎に手を当てた。

「日本に怪獣が出現して以降、幾多の事象に関して怪獣が原因とする論調があまりにも多過ぎます。今回も水産庁は怪獣由来の不漁と決めつけたように調査依頼をしてきました。我々で正確なデータを提示した上で、冷静な回答をすべきだと考えます」

畳み掛けるように、かつ冷静な榛香の言葉にも、冴島は返事をせず考え込んだままだった。

「隊長、調査はほどほどにして、怪獣出現時を想定した準備をすべきだ、と陽次朗さんに言われちゃいました。なんか、だいぶカリカリしてます」

護がやってきた。冴島は護を見遣ると、「護、UMAはこうした調査も大事な仕事なのだ。今度からはそう返事をしろ」と言った。護は唾を飲み込んだ。冴島は榛香に向き直った。

「榛香、ひとまず剣太郎が行う河川調査の結果を待とう。そこで問題がなかった場合、君のいう通り調査報告をする。報告書の作成を頼むぞ」

「承知しました」

榛香は頭を下げると、これまでの調査結果を引き出し、まとめにかかった。冴島はデスクのモニターから、海上保安庁の電話番号を引き出した。二、三、問い合わせたいことがあるのだ。

再び、福井県美原市。

岸壁から市内を流れる鹿野川へと向かうべく、剣太郎はチョッパーにまたがると海沿いの産業道路を西へ向かい出した。

不漁のせいだろうか、海沿いに造られた大きな漁協には活気がなく、普段はひっきりなしに通るであろうトラックの姿もまばらだ。漁船が岸にズラリと停泊しているということは、漁へ出ることもしないのだろう。

信号機のある交差点を右折し、やはり交通量の少ない県道に出たとき、傍らにあった食堂から人が飛び出してきた。

咄嗟にブレーキをかけたことで衝突は避けられたが、飛び出てきた相手もビツクリしたように身体を硬直させた。

だがバイクが止まったのがわかったと、そのまま走り去ってしまった。

「おい、お前！」

剣太郎はヘルメットを脱ぎ、走り去る相手を咎めた。高校生だろうか、学校の制服に身を包んだ少年だった。

「コラー！タツヤー！」

すると食堂から、作業着を身につけた中年の男性が後を追うように飛び出してきた。先に走り去った少年を追いかけて、路地を走っていった。

「タツゾウさん！もうホントに……」

今度は食堂から、エプロン姿のふくよかな女性が出てきた。食堂の名前だろうか、『清山』と書かれた刺繍が施されている。

「あんた、ごめんなさいねえ。危なかったわねえ、いま」

言いながらその女性は剣太郎に歩み寄ってきた。剣太郎のジャ

ケットに付けられたバッジに注目すると、「あらあんだ、UMAの人？」と目を拡げてきた。

「ああ。しかしなんだよいまの？もうちよつとで轢いちまうところだったぜ」

「ごめんねえ。まったく、困った親子だよ」

「親子？」

「そうなのよ。もうね、さっきここでケンカして、息子が飛び出していつちやったのよ」

その女性は困惑しきつた顔で言うと、ほおに手を当てて俯いた。

少し話を聴くべきか、剣太郎はチョッパを降りた。食堂のガラス戸には、美味そうな定食の見本が飾られている。

危ういところからホツとしたせいかな、そういえば、腹が減った。



### 第3話 目を覚ませ、男なら！ Ⅲ

～福井県美原市 越前丹後 食堂『清山』～

「うまーうまー！」

ザツパザツパとあら汁を掻き込むと、剣太郎はどんぶり一杯に盛られたツヤツヤのコシヒカリを口に入れる。

「コメもうめえー！」

口いっぱい頬張る剣太郎を、にこやかに見遣る女将の清山敏美。

「あんた、本当に美味しそうに食べるんだねえ。作り甲斐あるわあ」

そう言うとお、おかわりであら汁をわけて寄越した。

「もうね、あんたの姿見るとサービスしたくなっちゃったよ。ほら、どうぞ」

「おおー女将さんありがとう！何杯でも食えるぜ」

おかわりも平らげようとする剣太郎の向かいに、敏美は座った。

「おばちゃんよお、おかわり分も勘定払うよ。全部でいくら？」

さすがに気が引けてきた剣太郎は財布を出したが、敏美は剣太郎の手を抑えた。

「いいんだよ。こんなに美味しそうに食べてくれたんだもの。それに、あんた見ると、なんだか息子を思い出してきちやえてねえ……」

ふくよかな顔に浮かんでいた微笑みに影が差した。剣太郎は噛み砕いたエビの殻を飲み込んだ。

「息子さんは、どっかいるのか？都会に出てるのか？」

そう訊くと、敏美は首を横に振った。

「うちの旦那も息子も漁師でねえ。親子して漁に出てたんだけど、ほら、3年前の【蜂起の日】だよ。ヨーロッパやアメリカなんかと違ってアジアはほとんど被害出なかったけれど、日本海にゲスラが逃れてきたでしょう。あのとき、ゲスラが泳いだことで波が高くなって……運悪くうちの息子の船が巻き込まれてね」

悲しそうに笑った敏美の目に涙が浮かんだ。言われてみれば……厨房の奥に、そっくりな男性2人の写真が掲げられている。

「おばちゃん、悪かった。オレ無神経なこと訊いちゃまって」

「いいええ。こうして元気に働くことが、2人の供養になると思ってがんばってるんだよ。気にしないでいいよ。でも、ねえ……」

また表情が陰った。

「ごこんとご、ずつと不漁でねえ。町の漁師たちも仕事なくて外へ出ないで呑んでくれてるし、町の活気もなくなっちゃって。いつまで商売続けられるかわかんないんだよ。早いところ、漁が再開してくれると良いんだけどさ」

深刻そうにぼやいたが、気を取り直したように顔を上げる敏美。

「やだよお、ごめんね隊員さん。こんな湿気っぽいこと。さき、もつと食べて良いよ」

無理に笑顔を作ったようだ。顔を背けたときに目を拭ったのを、剣太郎は見逃さなかった。

「おばちゃん、オレさ、いまその不漁の原因調べてんだ。きつと何か原因があるはずだから、オレたちが突き止めてやるよ。よし！景気づけに、もつとおかわり！」

剣太郎の威勢に、少しは元気を取り戻してくれたようだ。敏美は顔をくしやくしやにして、あら汗をわけて寄越した。

入り口の引き戸が引かれた。

「あら辰三さん。辰也は？」

辰三さん、と呼ばれたヤツケ上下の男性は、面白くなさそうに無言で腰を下ろした。

「あんのバカ息子なんか、どうにでもなつちまえてんだよ。敏ちゃん、酒くれ酒！」

「んもう、あんたらは漁出れないからって呑んでばっかり」とぼやきつつ、敏美は一升瓶を持ってきた。

「おっさん、ちよつといいかな？」

剣太郎は席を立ち、辰三の向かいに座った。訝し気に睨みながら、コップに酒を注ぐ辰三。

「ぎつき、あんたの息子がここ飛び出したとき、危うく轢くところだったんだ。別に怒ってるワケじゃないが、そのことで話をしたいんだ」

ギロリと剣太郎を睨むと、酒臭い息でまくし立てる。

「あんな野郎、いつそ轢いてくれてよかったんだがよ！」

「おい、そりやないだろ。あんた実の息子だろうが」

「うるせえぞ、おい！お前この辺の野郎じゃねえな。おお、そのバツジはUMAだな？いいからさっさと怪獣の一匹でも二匹でも仕留めやがれ」

カチンときた剣太郎だったが、軽く深呼吸した。見かねた敏美が厨房から出てきた。

「辰三さん！うちのお客さんに何てこと言うの！」

ケツ、と声を出した辰三はコップ酒をあおると、乱暴に一升瓶を注いだ。

「ごめんねえ」と言う敏美。

「気にしないで良いよ。おっさん、息子の行先知らねえか？」

「知らね。その辺りでくたばってりや良いんだよあんな野郎」

グビグビと日本酒を飲み干す辰三。

「ごめんください」

入り口から誰か入ってきた。

「あら、坂本先生」

敏美が駆け寄った。

「辰也は、来てませんか？」

坂本と呼ばれた男が訊くと、敏美は辰三を見遣った。すべてを察したように頷くと、坂本は辰三に近寄った。

「辰三さん、昨日も電話で話しましたが、やっぱり辰也君、演習に・・・」

コップが叩き割れんばかりにテーブルに置かれ、坂本は二の句が継げなかった。

「うるせえんだよ！先生、さっさとアイツ退学させてくれよ。あのバカにこれ以上勉強させても意味がねえ。授業料の無駄遣いだ」

帰るぞ、と小銭をテーブルに放り投げると、辰三はズカズカと出て行った。

「弱ったなあ・・・」

坂本は力なく椅子に座った。水を持ってきた敏美が「あの親子にも困ったもんだよねえ」とぼやいた。

「あもう、口挟むようだけどき」

剣太郎は坂本に言った。

「さつきひよんなことから知り合ったんだけど、いったい何がどうなってるんだ？」

「僕から説明しますか。UMAの方ですね」と坂本は言い、名刺を差し出してきた。ウインドブレーカーにネクタイといういでたち、見るからに学校の先生といった風貌だ。

「私、美原水産高校で漁船運用を教えている坂本と申します。息子さん、辰也くんの担任です」

「オレは三堂剣太郎。UMA日本支部所属だ。なあ先生、さつきの話だと、辰也つて子は学校退学になるくらい出来悪いのか？」

「とんでもない！」と坂本は大げさに手を振った。

「辰也君は、うちの生徒の中でもズバ抜けて操船、機関運用の成績が良いです。魚類生態や水産の知識も豊富です。お父さんの辰三さんの息子さんだけのことはあるんです」

「あれでもね、辰三さんは丹後漁港の漁師頭なんだよ」と敏美が捕捉した。

「うちの学校では外洋演習といって、希望者のみですが3カ月の遠洋訓練を行うんです。漁師を目指す生徒に勧めてる演習なんですけど、特に辰也のような知識と技術を持つ子には是非とも参加してほしいんですよ。最初は彼も、演習に参加する気でいたんですけど・・・」  
そこで言い淀んだ坂本は、どこまで話して良いものかと敏美を仰いだ。

「来週、辰也のかあちゃんの13回忌だね。辰三さんは演習に出ないで、辰也に居てほしいんだよ」

「そこでどうして揉めるんだ？」

剣太郎が訊くと、敏美も坂本もため息をついた。

「辰也も、難しい年頃でしょ。ここんところ親子の会話がほとんどないから、辰三さんは法事の準備を一緒にやって辰也との距離を縮めた

いらしんだよ。ところがあの通り、素直じやないし意固地だから。4日前だったねえ、頭ごなしに『演習なんか行くんじゃない、母ちゃんの法事も出ねえなんてこの親不孝者!』なんて叱つちまったものだから……」

「辰也も頭に来たんでしようね。2日、無断欠席したんです。こちらの清山さんがうちに入り浸っているって連絡をくださったので、私も話を聴きにここへ来ていたのです。ところが、辰也、学校へ行ったフリをしていたんです。ここで話を聴いているのを、昨日たまたま通りかかった辰三さんに見つかってしまつて……。学校行く気ないならもう辞めろ、さつさと漁師を継げ、と大騒ぎになつてしまつたんです」

「呆れちまうよねえ、飲んだくれて酒なくなつたから買いに出てきたときに会つちまつたものだから、酔つた勢いで大ゲンカ。しようがな

いから、辰也を昨日うちに泊めてただけど、退学しに行くぞつて連れ戻しにきたんだよ。また大ゲンカになつて辰也が飛び出しちゃつて……。それがさつき」

大きいため息をつく坂本と敏美。

「親子なのに、そんなにケンカするんだなあ」

「剣太郎はぼやいた。不思議そうに坂本と敏美は剣太郎を見た。

「先生なあ、オレも辰也に用事があるんだ。探すの手伝うよ」

「忙しいのにもうしわけない、そうしていただければ……」

坂本は頭を下げたが、敏美は剣太郎が辰也を探す理由を話すと、微妙な顔つきになった。

「勘違いしないでくれよ、何も捕まえて説教しようつてことじやない。辰也が本当はどうしたいのか、オレも気になつてきたんだ」

「気持ち嬉しいんですが……あの、UMAの方がそもそも、どうしてここに？」

坂本が訊いてきた。

「うちでも不漁の原因を調査してんだよ。まあ各所の定点観測による水質調査も、今のところ特に異常ないんだけどな。残りの調査がてら、辰也も探すよ。先生も、もし変わったことあれば教えてくれよ」

そう言うと、「おばちゃん、ご馳走さん。うまかつたよ」と勘定を済

ませ、外に出ようとした。

「そういえば」と、坂本がつぶやいた。

「変わったことというのか……ここ最近、波の花が現れるんです」

「何だいそりや？」

足を止めた剣太郎に、坂本はスマホの画像を見せてきた。

「海面に浮かぶこのメレンゲ状の白い泡がそうですよ。海面が強い風と波にさらされることで作り出される現象なのですが……」

「おう、それがどうかしたのか？」

「通常、11月から3月の厳冬期に見られる現象なんです。日によって肌寒い日があるとはいえ、5月近くに観測されるのは珍しいので、写真に収めていたんですよ」

「ほう……先生、差支えなければこの画像いただけないかい？オレあんまり詳しくないが、うちに海洋学詳しいコいるから訊いてみるよ」

### 第3話 目を覚ませ、男なら！ IV

く福井県美原市 越前丹後4丁目く

坂本教諭から教えてもらった住所を頼りに、剣太郎は狭い路地を低速で進み、目当ての住宅でチョツパーを止めた。

古い市営住宅とのことだったが、瓦屋根平屋の住宅は築40年は経過していそうな装いだった。縁側に趣味なのか5つの鉢が並べられ、小さなきゆうりが実を作っている。

昨今の不漁で仕事にも出ないから、おそらく自宅にいるはずだと坂本教諭には言われていた。たしかに駐車場には軽トラックが1台、止まっている。

「気難しい人ですから」

そう、坂本教諭が話していたことを思い出しながら、剣太郎はヘルメットを脱いで住宅の玄関に立った。呼び鈴などと洒落たものはなく、ガラス戸を引くのみらしい。

「ごめんくださいーい」

声高らかに家の中へ呼びかけるが、反応がない。ガラス戸は鍵がかかっておらず、建付けが良くないのか引き戸の響きが手に伝わる。

「ごめんくださいーいー」

もう一度呼びかけると、玄関から続く廊下の奥からガサゴソと物音がした。やがてくたびれたヤツケ姿の男性がぬうつと顔を出した。

「宅見さん？オレUMAの隊員で三堂剣太郎ってんだけど、高校の坂本先生から・・・」

だが宅見はギョロリと剣太郎を睨みつけ、だいぶ禿げ上がった頭を近寄せてきた。

「UMAだあ？てめえ、てめえもどうせオレの話笑いにきやがったんだろが」

近づいた顔からは、だいぶ酒の臭いがする。

「い、いやそういうんじゃないよ」

「怪我しねえうちに帰れよ、このガキが」

まるで取りつく島もなく、宅見は戸を閉めてしまった。怪我しねえうちに、と言われて思わず昔の血が騒いだ剣太郎だったが、酔っぱらいの親父相手にケンカをふっかけに來たワケではない。ひとまずどうしたものかと思案したが、廊下に並んでいた酒瓶の数々を思い出し、再びチョッパ―にまたがった。

しばらくして、剣太郎はもう一度宅見の家を訪れた。

「宅見さーん、宅見征三さーん？」

大声で玄関を開けると、宅見は顔を真っ赤にさせてズカズカとやってきた。

「この野郎ー！」

怒声を浴びせてくる宅見に、剣太郎は近所の酒屋で買ってきた地酒を突き出した。

「あんとと、酒を呑みたいんだ」

それからややあつて、座敷に通された剣太郎は宅見に湯飲み茶碗へなみなみと地酒を注がれていた。

「いやあ兄ちゃん、あんとたみてえに話のわかる若えモンは初めてだ！どだ、うちの漁協に來ねえか!」

「それいいなあ！そしたらオレおっちゃんの船に乗せてくれよ！」

「ガハハつ、オレの操船は粗いからなあ、ゲロ吐くなよお!」

「よおしおっちゃん、いまから吐く練習だ！どんっどん呑もうぜ！」

大笑いしながら、剣太郎は宅見の茶碗に返杯する。

実は酒屋へ着いてから、坂本教諭に電話して情報を得ていた。

「あれ以来、宅見さんもすっかりふさぎ込んでしまつて……。本当は寂しいんだと思うんですけど、越前丹後の男衆らしく、なにぶんにも意固地な方ですから」

とのことだった。廊下にズラリと並んだ酒瓶がすべてを物語っていると感じた剣太郎の直感は正しかった。酒を一緒に呑むことで、宅



見の心は間もなくほぐれた。

「おお、そろそろカニが茹で上がったろなあ。ちいっと待つてろ」

台所から磯の香りがしてきたのがわかり、宅見は立ち上がった。冷凍にしてあるズワイガニを茹でてくれたのだ。

「ほれ兄ちゃん、一緒に喰うぞ」

茹で上がったズワイガニのようにすっかり赤くなった顔にいつもの笑みを浮かべ、宅見はズワイガニを振る舞い差し出した。

宅見に倅い、剣太郎もズワイガニの身をすすり出す。脚は比較的簡単だったが、前脚のハサミが固くなかなか身が取れない。

「ハハハ、どうれ、貸してみろ」

宅見は造作なくハサミをもぎとり、中の身を差し出した。

「おっちゃんすげえな！一発でハサミが抜けたじゃねーか」

「カニはなあ、カじゃ抜けねえんだよ。いまみてえにハサミの付け根んとこあるだろがいね？ここんとこひねり上げれば関節がスツと抜けて中身食えるんだ」

早速ハサミの身にしゃぶりつくと、これまで以上の歯応えと海の香りが剣太郎の口内を悦ばせた。

「いや〜つ、たまんねえな！カニはうめえし酒もうめえ！」

グビグビあおる剣太郎の茶碗に、宅見はお代わりを注いできた。

「ハハハハ！おめえ丹後に来れば毎日コレ食えるぞお！」

グイッと茶碗をあおり、宅見はカニの脚をしゃぶった。

「なあおっちゃん、ここいらでオレに仕事させちゃくれねえかな？」

宅見に返杯しながら、剣太郎は訊いた。

「おう、酒呑みながら仕事たあ感心だな。仕事つてなんだ？」

「実はさ、ここんところ日本海一帯で不漁が続いてるだろ？その調査でここに来ただけだよ。おっちゃん、魚獲れなくなってきたーカ月前、怪獣見たんだって？」

愉快に笑顔を浮かべていた宅見だったが、怪獣という単語を耳にして顔に影が差した。

「悪いとは思ったんだが、清山のおばちゃんと高校の坂本先生からあなたの話をきいてきたんだ」

「・・・おい、UMAの兄ちゃん」

酔いが醒めたように、宅見は低い声を出した。

「オレの話、信じてるって方が無理かもしれないねえけどな」

「オレは信じるよ。酒好きな男はみんな正直者だからな」

そう言つて剣太郎は宅見の茶碗に日本酒を溜めた。ひとくちあおると、それを合図にしたかのように宅見は話し始めた。

「そう、あんときは桜が咲き始まった頃だったなあ。漁が思わしくない上折からの燃油代高騰だから、漁協が漁の中止とかほざきやがって、機嫌悪いまま出航したときだ。案の定、なあんにも獲れなくてなあ、そろそろ引き揚げつかと思つてたときだったなあ」

ひと息つき、また酒を含む。

「4月には珍しい、波の花がプカプカいつぺえ浮いてきたんだ。風もたいして強くねえのに、おかしいと思つてたらな・・・。見たんだよ、海の底にでつけえカニみてえな怪獣がいるのを」

剣太郎は口をはさむことはせず、宅見の目を見て頷いている。

「慌てて港へ戻つてよお、漁協と海上保安署に駆け込んだんだ。怪獣が海にいるぞつてな。ところが、誰も信じやしねえ。どうしてかわかるか？レーダーにも魚群探知機にも、怪獣の姿が映らなかつたからだ」

そう言う宅見の口調には、怒りと悔しさが滲んでいた。

「そりゃあなあ、操船しながらカップ酒あおつたのは間違いねえよ。4月でも海は寒くてしようがねえから。でもよ、酔っぱらって何かと見間違えたんだろつて決めつけられたんだよ。そこからはいくら本当のことを話しても信じちやくれねえし、漁協の組合長からは、ただでさえ不漁なのにこれ以上悪い噂広まるのはよくねえつてんで、UMAにも通報しねえことになったんだ。それからもう、地元の奴らみんなオレを酔いどれだなんだ悪口言い始めてよお、情けねえ話、すっかりオレもふさぎ込んだまっさあ・・・」

涙声になって茶碗に伸ばした手を、剣太郎はしっかりと握った。

「おっちゃん、話してくれてありがとな。オレ嬉しいよ、おっちゃんにとってつらい話だろうに、話してくれて」

そう言われ、宅見は目線を下にそらした。

「兄ちゃんよお、UMAなら、しつかり調査してくれんだろう？」

「もちろん。実はな、UMAでも調査進めてて、いまのところ怪物がいる形跡は見つかからねえんだ。でもきつと何か、ワケがある。おっちゃんの話聴いて余計にそう思ったよ、オレは」

ちょうどそのとき、剣太郎のiPhoneが鳴った。

「おっちゃん、ちよつとゴメンな」

座敷を中座して外に出ると、iPhoneの画面に顔を真っ赤にした陽次郎が映った。

『剣太郎！貴様報告もしないで何をやってるんだ!?!』

「ああ、悪イ悪イ。調査長引いちまってな」

『河川のデータに問題はないから帰投しろと連絡したはずだぞ！グズグズしてないでさっさと本部に戻ってこい!』

「そうしてえんだけど・・・酒呑んじまったからなあ・・・」

『・・・なあにいいいー!?!?』

耳をつんざくような怒声が、インカム越しに伝わってきた。

『貴様！調査の途中で飲酒したのか!?!』

「お、おう。調査進める上で必要だったモンで」

『剣太郎お!!貴っ様ー!!』

怒りで茹で蟹ようになった陽次郎をどかし、榛香がモニターに映り込んだ。

『三堂、調査は遊びじゃないんだよ。帰投命じられてるのに従わず拳句に飲酒するなんて、あなた本当にUMAの隊員なの?』

口調こそ冷静だが、榛香の目には陽次郎のそれと遜色ない怒りがにじんでいる。

『そうだ！貴様軍法会議ものだぞお!』

怒りで食って入る陽次郎を、『ちよつとやめなよ、ここは軍隊じゃないんだから』と榛香が押し退けた。

「いやあ、悪かった。そう言われちゃそうだよな」

苦笑いする剣太郎だったが、当然そんなことで画面の向こうが落ち着くはずはない。

『反省して済む問題じゃないでしょ。あなたのしたことは処分対象に該当するの。身勝手な行動の代償は払わなきゃいけないんだよ』

「それもそうだけどよ、なあ二階。地元の人たちに話を訊いたんだが、怪獣の目撃情報や時節的におかしな現象があったって話もあるんだぜ。もう少しその辺……」

『だから！そんな調査は要求してないでしょ!!』

とうとう堪忍袋の緒が切れた榛香が怒鳴ったが、すかさず背後から冴島がやってきた。

『剣太郎、その話を詳しく聞かせてもらいたい』

戸惑う榛香を尻目に、剣太郎は坂本教諭や宅見から得た情報を話した。

『いい加減にしろよ、酔っぱらいの見間違えに本気になってるのか貴様は』

わきから陽次郎が口をはさんできた。

『剣太郎、もう1日だけそこで調査をしてほしい』

冴島の言葉に、陽次郎は鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

『怪獣の目撃情報と、波の花について詳細を調べるんだ。どのみちチョッパーは運転できまい』

「おお！さすが隊長さん！話がわかるねえ!!」

『だから貴様！隊長には敬語を……!』

『頼んだぞ、剣太郎』

荒れる陽次郎を無視し、冴島は通信を切った。

「おい兄ちゃん、話してえこと話してすつきりした、もつと呑むぞ」  
玄関から宅見が声をかけてきた。

「おうとも！上司の許しももらったし、ガンガン呑むぜ！」

座敷に上がり、蟹をつまみに酒盛りの続きが始まった。

「おーい征三！回覧板持ってきたぞお」

誰かが玄関から声をかけ、勝手に座敷に上がり込んできた。

「おっ、テメエはー！」

辰三だった。

「UMAの若造が何してんだ？」

「宅見のおっちゃんと仲良くしてたんだ。辰三さんだったよな、一緒に呑もうぜ」

戸惑う辰三に、剣太郎は座るように促した。